The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞タージョッ・サルタネの回想録＜その一＞ (M. Ettehādīyeh & S. Sa'dvandiyān, ed., Khāterāt-e Tāj os-Saltaneh, Tehrān : Nashr-e Tārīkh-e Īrān, 1982, pp. 1-44)
Author(s)	藤元, 優子
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1992, 2, p. 157-208
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99653
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

タージョッ・サルタネの回想録〈その一〉

(M. Ettehādīyeh & S. Sa'dvandiyān, ed.,
Khāterāt-e Tāj os-Saltaneh,
Tehrān: Nashr-e Tārīkh-e Īrān, 1982, pp. 1-44)

藤　元　優　子

解説

以下は、1982年に出版されたカージャール朝第四代の王ナーセレッディーン＝シャー（在位1848－1896）の王女タージョッ・サルタネ（1884－?）の回想録の翻訳である。この回想録は1914年頃書かれ、そのうち手に入った部分を在テヘランのアフガニスタン大使館員が1924年末から1925年初頭にかけて書き写したものである。

自伝、他伝を問わず、伝記を書き残す伝統自体が皆無に近いイランにおいて、自らの半生を感情を込めて書き残したという点においてだけでも、この回想録は大きな価値を持っている。その著者が女性であり、しかも王の後宮で暮らした王女であるとなると、その希少価値は計り知れないものとなる。

タージョッ・サルタネは、ナーセレッディーン＝シャーとトゥーラーノッ・サルタネとの間に1884年に生まれた。回想録中にもあるように、7才で学校へ通うが、気侭な性格が災いして2年後にはやめ、王族の一人のハサン＝ハーン＝ショジャーオッ・サルタネと婚約する。13才で結婚し、4人の子をなすが、押し付けられた夫との生活は不和を生み、離婚の憂き目を見た。不幸な結婚生活ではあったが、青年期に入ってから向学心に目覚め、音楽、絵画のほか、フランス語も学び、その助けで西欧の文学、歴史、哲学にも、広く浅くながらかなりの知識を有していたことが窺われる。公衆の面前でヴェールを取り、また洋装を取り入れた女性としても先駆け的存在であった彼女はまた、自他共に認める美女であった。しかし、その西洋志向と美しさを目当てに集まる「取り巻き」連のために、彼女

が被った被害も、小さなものではなかったらしい。そうでなくても伝統と迷信に凝り固まった後宮のことである。様々な人から吹き込まれた知識にかぶれた彼女が口を開くと、母親さえ遠ざかっていったというし、この回想録を書いた30才ごろまでに三度の自殺未遂を起こしたことは、彼女に対する周囲の圧力の強さを物語っている。

編者はその前書きの中で、この回想録を、西洋文明の流入とそれに対する上流階級の反応を示す歴史資料であるとしているほか、その叙述法に特色を認めている。それは具体的には、①情景描写の豊かさ、②登場人物に対する鋭い観察力、③文法的に破格な用法の多い文体であり、そこにはタージョッ・サルタネがフランス語あるいは翻訳で読んだとみられる外国文学の影響が認められるとしている。実際、この回想録は、女性が書き残したと確認できる纏まった散文としては最古のものに属し、時代的にみても、現代散文への過渡期の資料として重要である。

また、王族に属してはいたが、当時の社会的風潮を反映して専制を批判し、自由・平等の精神に基づいて立憲運動に強い共鳴を示していること、女性解放を随所で主張していることなども、注目に値する。

なお、翻訳中、（　）で囲まれた部分は原注、［　］部分は訳者による補足である。

翻訳

> タージョッ・サルタネ夫人の半生の記録は、自らの筆で書かれ、その後、写されたものである。［イスラーム太］陰暦1343年ラビーオッ・サーニーエ月19日月曜日、すなわち太陽暦1303年アクラブ月25日［西暦1924年11月17日］。上記の夫人は、カージャール朝の故ナーセレッディーン＝シャーの娘である。(1)

1332年ラビーオル・アッヴァル月30日［1914年２月26日］水曜日夜。曇り空で暗く、私の思いのように悲しみに満ちた、とある午後、私は薄暗い部屋に座って絵を描いていた。雪が激しく降っていて、風の音以外、何も聞こえなかった。悲しみを誘う静けさが私の全存在を取り囲み、そこに暖炉から放たれる穏やかな赤

い光が加わっていた。

私の背後にいる悲しげな若者のことを私は思いもしなかったし、忘れていた。その人は、肘掛け椅子に座り、同情と親切心に溢れるまなざしで、私が描いていた少女の顔に運ぶ無気力で誤った筆運びを見つめ、何度も繰り返して溜め息をついているのだった。

彼はとうとう言った。「あなたはむやみと自分の頭を疲れさせていますね。少し休んだらどうですか。天気も薄暗くて、絵を描くのは当分少し難しいでしょう」

こんな声を聞くとは思いもせず、一人きりだと思っていた私は、ひどく驚いてこう口走った。「ああ、ソレイマーン！あなたがここにいたなんて」

彼は寂しげな微笑を湛えていった。「思いがひどく複雑に入り乱れているせいで、あなたはいつも目の前にいる人を、いや自分自身さえも忘れてしまうのです。あなたが余計なことばかり考えてしまうのは、空恐ろしくなるほどですね。物思いに耽ってしまいそうになったらすぐに、自分を元気づける話をしたり、散歩に出たり、自然に親しんだり、過去の歴史資料を読んだりしてみたらどうですか」

私は苦笑いし、我を忘れてこう叫んでいた。「ああ、私の先生である従兄弟よ。私の過ぎ去った人生や今の生き方自体が、驚くべき倦怠に満ちた歴史だというのに、この上ほかの歴史に私が興味を持つなどと思っているのですか。個人史の流れを追うのは、世界で一番優れた事業ではないかしら？」

彼は肩を竦めて言った。「経験の結果の善し悪しがすべて一個人に関係しているものなど、私は歴史とは認めませんよ。実際、あなたの歴史がもしそんなに驚くべきものなのであれば、どうして私が利用して教訓を得られるように、それを聞かせてくれないのですか」

私が「私の歴史には重要で難しい出来事が本当に多いので、もし一年を全部使ってあなたに語っても、まだ終わらないでしょう。そして、時にはあまりに悲しく、時にはあまりに喜ばしいものなので、聞き手の驚嘆の的になることでしょうよ」と言うと、彼は好奇心をこめて言った。「へえ！冗談でも話してくれるんですか？！」

しかし彼はすぐに私の顔に真実と本気を見て取って、その洒落や嘲笑の色を消し、考え深げに言った。「ねえ。あなたは私のために半生を語ってくれないでしょ

うか」

私は、「いいえ」と言った。

それでも彼は希望という形で願い続け、私がいくら拒絶しても主張を取り下げなかった。私はとうとう「口述する気はないけれど、私の過去の歴史のすべてをあなたのために書くことを約束しましょう」と言った。

彼は大いに喜び、感謝した。しかしここで第一に、この私の先生について少し語っておくことが必要であろう。その後、本題に入ることにしよう。

この若者は1307年モハッラム月11日［1889年９月７日］に生まれた。初等学校で学んだ後、1324年［1906年］に17才で「托鉢僧と神秘主義者の会[2]」に入った。２、３年の間、神秘主義者と詩人の門人となって努力した。その後、「政治学校[3]」に入ったが、そこにもまた、すぐさま疲れて去り、「美術学校[4]」に入った。彼が絵を描き始めて二年になる。

彼の人生の変遷をみると、私たちはよく彼の性格が分かり、この若者がとても気紛れで、確固たる決意を持ち合わせていなかったことを理解できる。18、９才のとき、ある想像上の人物にプラトニック・ラブをして、かの有名な「ドン・キホーテ」的行動に出た。とうとうその想像上の恋人の元に辿り着いたが、その恋人はこの気違いじみた恋人を裏切った。すなわちこの若者に多くの苦労をさせた挙げ句に、旅に出てしまって、この私の親愛なる先生である「アーティスト」に別離の苦悩を味わわせたのだった。

彼の性格については十分述べたので、今度は彼の外見について少し述べよう。彼は黒い大きな目をした、高貴で好ましい顔立ちをしている。顔付きは考え深げで悲しげで、頬はこけている。顔色はほぼ黄色。鷲の嘴のような鼻。私は彼を見るといつも、『フランス史』を読んでいた時代を思い出す。この本の中でコンデ大公家[5]について述べられる際には常に、その一族の鼻を鷲の嘴にたとえていたものだったから。彼はとても穏やかで平静で、目下の者に対しても謙虚で気取らない。神秘主義の道に入っている同年齢の人とは、とても快活にふるまう。分別がある。これが私の先生の容姿と性格である。

それでは、己が人生の歴史を述べ始めることにしよう。そしてこの奇妙な若者に、私はとこしえに感謝し、過去を振り返りつつ、自らの努力と幸運を思い出そ

う。

＊＊＊

私は1301年の終り頃［1884年秋頃］、王家に生まれた。母はカージャール家一統で、父の父方のおじの娘にあたった。私が生まれたとき、彼女は大層若く、美しく、謙虚な性格だった。とりわけ敬虔この上なく、四六時中神を思い、礼拝に励み、宗教書を読み耽っていた。

しかし、素晴らしい王女であるからといって、良い母になれるとは限らない。つまり、母として備えているべき物があの人の中にはなかったのだ。私は決してここで、自分の貴く神聖なる母を貶めようというのではない。そうではなく、あの人のせいではなかったのだ。代わりに、ここで国の慣習や道徳に注目するべきである。それは、全女性の幸福への道を制限し、この哀れな人々を無知の極みにとどめておこうとするものだった。そして、あらゆる道徳的短所と堕落は、わが国では女性の知識の欠如によって生み出され、広められてきたのだった。

もし厳密かつ賢明に考えれば、あらゆる新発明や賞賛すべき大発見、商業的、政治的、軍事的知識が、母から生まれていることに気付くであろう。なぜなら歴史的大事業の創始者は皆、教養ある母と進取の意気高い父とに保護され、見守られて成長した母親たちの子供であったからだ。彼らはこのようにして、技術や発明の分野の先駆者となり、文明世界における真の奉仕者となったのだ。同様に、真の軍人、独立運動家、愛すべき自由主義者も、母親から生まれ、その教育の元で成長していったのだった。例を挙げれば、スパルタ人は、残酷で凶暴な人々だったが、勇敢な子弟の教育に熱心であったために、長きにわたって独立を守り、ギリシアの首都であるアテネを破壊し、荒廃させたそうである。中でも、一人の息子が戦から戻って、母に「私の剣は短い」と言うと、母が優しく「愛しい子よ、一歩前に出れば良いのです」と答えたという話は有名である。

また、別の逸話では、ローマ独立当時、ゴール人がローマ人を攻撃し、大戦争となった。暫く後、和議が結ばれ、和平を強固なものとするためにローマ人側に人質が要求され、多くの人が人質となった。その中の一人の少女は、尋問を受けた際に、政策的にローマ側の独立を脅かすこととなると判断するや、自分の舌を噛み切って王に向かって投げつけ、自らは川に身を投じて、ようよう祖国に戻り

着いたという。

そう！良き母とは、道徳的指導者であり、教養ある母は、誇るべき子を持てるのである。だが一方で、今日私たちを一種の不幸と脆い独立に対する不注意の中に貶め、最下層の世界に彷徨わせているのもまた、母たちなのである。彼女たちは、そのような愛国心や誇り高い進取の意欲を、子供の誕生の瞬間から完全に霧散させ、寝食と不道徳以外、何も我々に教えてこなかったのである。

何という違いだろう、恋人を胸に抱くと

待ち詫びるまなざしを扉に向けるとでは

子供時代に薫陶を受けるのと、迷信や適切でない行動を習得した後、青年期になってから自らを飾り立て、他人の猿真似をするとでは、大きな相違がある。どれ程人が賢明でも、子供の頃学んだことを忘れることは不可能なのである。そして、よし他人と同じ色に染まりたいと思っても、それは表面上のことで、性格までは変わりようがない。

つまり、幸運の第一の扉は、母の手で子供に開かれるのだ。だが、悲しいかなこの幸運の扉は私には少ししか開かれず、私の一生の大きな不幸はすべて、ここから始まったのだ；

中流階級から、私のために乳母[6]が決められた。子守[7]と老女中[8]も同じ階層だった。この子守は、とくに黒人でなければならなかった。なぜなら、当時の寛大な考え方によると、神様は奴隷たちにどんな区別もつけてはおられず[9]、ただ皮膚の色次第で、――そして、もし公平な目で見れば、創造主の宮廷では白黒の別は問題ではない――哀れな人々を捕え、辱めて、自分たちの地位と栄光の道具とし、「金で買ったもの[10]」と呼ぶのだ。まるで家畜のように、この哀れな人たちを金で売り買いする。母が王家に属し、この後宮で敬われていたこと、父母が数年間ケルマーンとバルーチェスターンを治めていたことのために、私たちの家には、こういった子守、奴隷が数多くいた。そこで、この様な人々が次々と私たちの子守役と決められ、また、部屋係、会計係、洗濯人[11]も選ばれたのだった。

この不幸な人々は、常に軽蔑の目で見られており、家畜や獣と同じ扱いをされていたので、無知という荒野で成長し、本当にHとBの区別もつけられなかったのだから、文明的な規則や慣習についてなど分かるはずもなかった。こんな人々

が私を育てなければならなかったのだ、それに、ご同様の宦官も加えて。この宦官のすることといえば、人々にこの赤ん坊を崇めるよう命令することだった。そして、もしたまたまその義務を怠る者があれば、杖で力一杯打ち据えられるのだった。哀れな私を見守り、擁護して育てなければならなかったのは、こういう人々だった。そして私は自然に、この特別な指導者たちに甘やかされ、ちやほや扱われたのだった。

王家の威厳と王宮の広大さのために、私の家と従者は母の家から遠く離れていた。そして毎日二回、許可を得て、私は母の元へ連れて行かれ、しばらくしてまた連れ戻された。そうこうするうち、私は成長していった。私は幼児時代を覚えていないが、賢い子供だったので、5才の頃からのことは全て良く覚えている。とくに、物心ついた頃、私は乳母と老女中と子守をとても好きだった。中でも子守のことを。ここで、彼女の容姿と性格について説明して、読者の方々に知っていただきたいと思う。というのは、彼女は私の道徳教育と躾に大層力を注いだからだ。

彼女は4，50才の女性だった。顔はとても黒く、大きな目で、中背。とても無口で、希にしか口を開かず、話すととても粗野な感じがした。この私の大切な子守は、私の母をも育て上げた、いわゆる代々の「お子守役[12]」だった。有能で、あらゆる料理、飲み物、食べ物、酒蔵庫の全権が彼女の手中にあった。私にはとても優しく、他の人々には大層高飛車で、格式張っていた。恐ろしい顔付きと体格をしていたけれど、私は子守にすっかりなついていたので、もし一日でも離れ離れになると、私は夕食時まで泣き続け、どんな慰めを受けても気分が変わらなかった。そんな風だったから、私は今に至るまで、白い顔には違和感があって、いつも顔の浅黒い人を見ると、私の大切な子守を思い出して、好ましく感じるのだ。

私と「お子守役」の関係が親密だった分だけ、私は尊敬すべき大切な母親には距離を置いていた。そして、もし彼女が私を抱き締めてキスしようとしたら、私は大泣きし、すぐに走って大切な子守の胸の中に飛び込んでいった。そしていつも、彼女のポケットと神経質な黒い手の中をまさぐっていた！すると彼女は、いつも私に大好きなお菓子をくれるのだった。そして私は、彼女の方言で喋り、そ

の癖を全部真似したいと思っていた。それで、長年を経た今でも、あの子守の家族に会うと、とても嬉しくて話が尽きないのだ。そしてこの子守の愛情は、一連の乳母たちとの精神的な繋がりを、常に私に残している。

先生！自分の子供時代の癖や行状を書いても、どうか驚かないで戴きたい。私は自分の人生を完全に書き記すとあなたに約束したので、どんな些細な点も疎かにせず、すべてを書かねばならないのだ。しかし、自分の子守との繋がりはあるけれど、ここで説明したこういったすべての愛情を、自分の聖なる母親との間に持てていたら！そして一介の黒人の代わりに、自分の母について語れたら！堕落した思考と誤った創造、そして不適当な威風、威厳、衒学は、母親の愛情の甘さと子供時代を私にとって苦いものとし、不幸にも敬うべき母の胸から遠く隔たらせることになった。そして私は、あなたに事実に反することを書いたりはできない。

私が常に戒めとし、また悲しく感じていることを書こう。一つは、乳母の問題である：なぜ母親がわが子に母乳を与え、その情愛に満ちた胸の中で育ててはならないのだろうか。そしてなぜ、わが子から引き離されて、他人の手に委ねなければならないのか？乳母を雇えば、子供の嫌悪感は母親へと向けられるし、母の目からは、子供がそれ程大切に思われず、その慣習が愛情を一つの間違った形式に変えてしまうというのに。まさにその様にして、不幸な私は子供時代の初めに自分の母親の熱愛から引き離され、すっかり形式的な関係になっているのに気付いたのだ。そして子供の品行と将来の躾のためには、これはまさに大問題である。例えば、私自身４人の子供を持ち、皆が成年に達した今日、彼らの勉学に最大限の努力をしてきたにも拘らず、４人が４人とも別々の性格をしている。そして注意深く観察すると、それがそれぞれの乳母の性格に似て、私の性格とは似ても似つかず、彼らの乳母の影響が見出されることに気付く。さらに加えれば、もし私が彼らを母乳で育てて、その関心と親密さとが母親としての愛情と結び付いていたら、決して彼らを幼いうちに手放して、その父親と別れることもなかっただろう。たとえ千の苦痛と苦労を感じ、一生を苦しみのうちに過ごすことになったとしても。

もし私たちが良く注意してみたら、怠惰を捨ててわが子を自分から遠く離さず、

家族と子供の人生の混乱を引き起こさないようにすることが、すべての母親の第一の宗教的義務であると分かるだろう。そして表面的な価値を自然で精神的な物事より好まず、自分と子供の不幸を望まないことが。「水差しからこぼれる水は、その中にある水と同じである」すべての母親の第一の宗教的義務は、子供の教化である。そして世界の主たる成功のすべては、道徳から得られている。例えば、19世紀の終りに、ある学識あるフランスの名士がいて、人間社会哲学に正確な考察をなし、その著書は名士や学者の行動の手本と見なされていた。彼の名はジュール・シモン氏[13]といった。フランス議会では、演説者がその熱烈さで聴衆を疲れさせ、熟練した作家や報道陣のペンが御影石のやりのように割れ目を作り、国民が、薬の種類の選択と治療法に驚く病人のようにこの論争を見守る中で、ジュール・シモンは真の改革を説く著書の編集にあたった。

この叫び、ほとばしる興奮は何のためだったのか？真の改革法の模索のためであった。国家の法律の修正を主張する人々があり、政府からの宗教会議の分離を必要と考える人々もあった。農業の奨励を主張する者もあれば、教育予算の増額とその内規の充実を人民に訴えかける者もあった。有名なジュール・フェリー氏[14]を指導者とする経験豊富な人々の一派は、現状の打破をフランスの植民地拡大に見出だしていた。

この相反する様々な意見の中で、ジュール・シモンは何を言い、どう書いていただろうか？以下はその素晴らしい著書の要約である。

「物事の欠点を解決し、自らの社会形態を完璧な状態に達せしめようと欲する、あらゆる愛国的改革主義者は、自由、兄弟愛、平等、公正という神聖なる言葉が、心地よい響きを持ってはいても、確固たる基礎があってこそ有用な結果をもたらすと知るべきである。例えば、ある国民に、自由のための全条件を含む法律を定め、自由の意味を彼らの人生のあらゆる事象の上位におき、支配者たちを補佐役とともに職務につけ、外部の敵を制限したとしよう。それらはどんな結果をもたらすだろうか？幸福と繁栄を。勿論そのためには、この人々が時代の状況に精通し、進歩の要因を揃えることを疎かにしないこと、公平の大道を進み、知識と実践の導きに従い、目的に達することが必要である。我々は、自由、兄弟愛、平等、公正から利益を得れば、寛大な気質の持ち主となれる。歴史的経験、哲学者や賢

者の言葉、あらゆる宗教的規則の基本が我々に教えるのは、美徳とは人類の骨格となる魂、世界の人々の精神力、改革の堅固な柱である、ということである。

若木の枝にも似た寛大な道徳の根は、二カ所に生え出た。人間性の生ずる場であるその二カ所とはどこであろうか？家庭と学校である。いかにも、公正、勇気、愛国心、努力と行動の激情といった特質と博学の才の根は、この二カ所に生ずる。そして、家庭の親切な庭師と、学校の賢明な教師の世話によって、その短所が補われる。この、家庭の親切な一員とは誰であろうか？母である。母の子供に対する責任は何であろうか？教育である。知識、情報、文学的、社会的改革は、政治改革に先んずるものだ。この反対を実行することは、人が家の土台を強固に築かぬまま、そのヴェランダや天井を絵で飾り立てるのに似る。当然ながら、家庭教育は学校教育の前に始まる。実際、前者は後者の発展の基礎である。これは神が女性に与えるよう命じられた特徴と才能の一つである。

それゆえ、一国民の社会的改革、幸福の始めとなる甘い水、一民族の生活の甘く旨い水の意味、現代文明という隊商に達する望みは、女性の状態の改善と、彼女たちの教育にかかっている。それは、女性こそが教育者であるからである。そしてその子供たちが、幸せで幸運になるに加えて、文明世界にも大きな貢献となり得るのである。

先生！私の話題が時々はずれて、多少歴史的な挿話に及ぶことに、どうかうんざりしないで戴きたい。なぜなら、この様な歴史的引用は余儀なくなされるもので、それは私が次のことに大変心を痛めているからなのである：なぜ私の同性、つまりイランの女性たちが自分の権利を知らず、人間としての責任に思い至ろうとしないのか。そして、何かを成し遂げることなどまったくないまま、無駄でつまらない仕事に時を費やし、家の隅をはい回り、人生のすべての時間を不道徳の習得にのみ使い果たすのか。そして完全に文明の流れから取り残され、情報も知識もない砂漠でさまよっているのか、と。例えば、ほとんどの家庭で、今日ではある程度女性の進歩への道が開かれ、娘を学校へやることができ、その未来を科学と教養の光で照らすことができるのに、「娘を学校に通わせるのは、私たちにとって悪いことである。もしそんな日がやってくれば、あのかわいそうな娘たちは、惨めさと不幸の淵で教育されることだろうよ」などと言われる。［その娘も］

子供の母となり、その子供もまた、この母たちの保護の元に教育されねばならぬことに、彼らは気付いていないのである。

先生！このような家庭は大抵、いや，まず全てが知識を恥とし、無知を尊ぶというわけである。どうか苛立たないで戴きたい。ここからもう一度、昔のことについてあなたにお話ししよう。

最初に私が子供の頃の容貌や性質について書いておく必要がある。私はとても賢い子供だった。神様が、美貌に関しては私の顔にあらゆる幸福の翼を広げて下さったのだろう。私の髪はこげ茶色で、美しく長い巻き毛だった。健康的な色白で、大きな黒い瞳に長い眉をしていた。鼻は均整が取れていて口元はとても小さく、白い歯がバラのような唇から覗くと、人をハッとさせるのだった。大変美しい女性が集まっていた王家の中でも、容貌の美しさと好ましさでは私の右に出る者はいなかった。実際、私は崇拝に値する美しい子供だった。同様に、私の遊びや会話も全てが甘美で面白いものだった。私は父の妃たちやそのほかの王家の人たち共通の人気者だったが、それが私にとってはしばしば悩みの種になっていた。なぜなら、家から遊びに出て、心ゆくまで駆け回りたいと強く望んでいても、次々と通り掛かった夫人たちに掴まったからだ。そして彼女たちはキスをしたり愛撫したりするために私をしばらく放さず、その間、私は遊べなかったからだ。私はそんな目に遭いそうになると、必死に逃げ回り、子守の胸に逃げ込むようになった。そして時折、この人たちの一人が私を追いかけた挙げ句、キスをするようなことがあると、怒ってそのキスの跡を拭い、大きな瞳の中に炎をたぎらせて、彼女をにらみつけたものだった。繊細で上品で、けれど中流の娘たちの中から、5、6人が私の遊び相手に選ばれていた。この娘たちはすべて私より年上だったが、賢さの面では私よりも幼いものだった。なぜなら、ほとんどの子たちが、遊んだり、布を縫ったり、物を持ってきたりする時に、間違いを犯して私を怒らせたからだ。そして私は小さく白い手でその子たちを叩き、その後、遊びに熱中するのだった。

ここで私は、この遊び相手たちの容貌や性質について簡単に書いておこう。その後で、遊び部屋と子供の頃持っていたおもちゃのことを書くことにする。この娘たちは皆、読み書きの出来ない礼儀知らずで、その会話はとても単純で下品な

感じのするものだった。顔の美しい者が１、２人。その一人は金髪で色が白く、青い目をしており、いつも塞ぎ込んでいて、悲しげで、とても温和で従順だった。そしてとてもずるく、詮索好きでもあった。この悲しげな娘は、よく歌を歌っていた。また、別の娘は、肌が浅黒く、豊かな黒髪をしていて、その目は大きく、少し輝いていた。とてもおしゃべりで軽率。踊りがうまくて、おかしな位冗談好きだった。四六時中、おもしろい話や滑稽な動作を考え出すのに夢中だった。少々混乱したように笑って、子守の癇癪や叱責、呪いの対象になっていた。残りの遊び相手も同様で、様々だった。しかし一人として、若い娘が付き合うに足るような者はなく、それどころか、このような人たちからは遠のくことが必要だったのだ。

あらゆる種類のおもちゃが私のために用意されていた。しかし私は、音楽を格別愛していた。私はいつもピアノとオルガンでばかり遊びたがった。日中は遊びに夢中で、夕方になると、いつも偉大な父王陛下のところへ行っていた。そして大抵、お褒めの言葉を授かり、陛下は私を優しく撫でて、いつも可愛がってくれた。金貨を一枚ポケットから取り出して何度も私におっしゃるのだった。「この子はなんて可愛らしくて、ファタ＝アリー＝シャー[15]の王子たちに似ているのだろう」

私は父が大層怖くて、父を見ると、いつも知らず知らずに泣いていた。そして優しく撫でられても、それは変わらなかった。というのも、私は父以外の男性を見たことがなかったので、この人が特別で恐るべき人に映ったのだ。そしていつも、頂いた金貨は喜び勇んで子守のために持ち帰り、子守も私にキスをして、新しいおもちゃを一つ買ってくれると私に約束するのだった。

ここで、父の後宮の成り立ちや習慣、夫人たちの道徳について書く必要ができた。もちろんこの部分を読まれると、私をお笑いになるだろう。なぜなら、あなたは私を博学だと考えておいでだから。博士ではないけれど、あらゆる学問の。そして私がここで測量をせざるを得ないことに驚かれることだろう。でも先生！あなたの生徒がこれよりもっと博識であることは、ご存じのはずですね。

後宮は町の中心にあって、境界には建物があり、「禁裏[16]」と呼ばれていた。大きな中庭があり、百年前の様式で建てられたものだった。先に述べた建物は、

この後宮の東西南北の端に作られていて、互いに繋がった部屋があった。この中庭の回りはすべて二階建てだった。中庭の真ん中には三階建ての建物があって、青い鉄のフェンスで中庭と仕切られていた。実際は、美しい西洋帽の形をしていて、現代風のあらゆる装飾がなされていた。この建物は「寝所[17]」と名付けられていて、父専用だった。この建物は、アーガー＝ヌーリー＝ハーンに任せられていた。彼は事実上、後宮長官の補佐で、王の邸宅のあらゆる鍵と出入口の扉も、この人物に委ねられていた。

ここで、この宦官について説明する必要がある。年は40歳くらい、顔色は悪く、とても醜い容貌をしていた。耳障りな声の持ち主で、とくにいわゆる「人払いする」時その声が遠くから聞こえた。いつも、汚い青い服の上に白いサッシュを結び、それにとても大きな鍵の束をぶら下げ、またかなり太い杖を持っていた。そして、粗暴で傍若無人で、しばしば勿体ぶった態度をとった。とくにこの宦官は後宮の出入り扉の管理を任されており、細心の注意を払って出入りする人に気を配り、後宮に出入りする者は皆、彼の許可を得なければならなかった。後宮の夫人たちは、国王陛下から休暇の許しが出た後でさえ、アーガー＝ヌーリー＝ハーンの許しを得ねばならず、もし彼がそれを良しとしなければ、後宮を下がることはならなかった。後宮で使われていた３、40人の宦官全員が、後宮長官の命令によって、彼に任されていた。そして彼は職務に忠実で、上司より数段厳しく、真面目で注意深かった。そして、すべての夫人も彼に管理されていた。

ペルシア語の読み書きは出来なかったが、コーランだけは覚えていて、暇に任せては大きい声で朗唱していた。彼の生い立ちについてはよく知らないが、田舎者であったとは聞いている。そして、子供の頃に後宮に連れてこられ、私の父の元で教育を受けて宮廷で育ったので、父の性質である独裁性と生真面目さの神髄を、幼い頃からおのが習性として体得したのだった。そしてこの忠実という特性こそが、彼を高い地位に至らしめ、支配者然と成したのだ。例えば、もしだれかが瀕死の状態になって、医者を必要としていても、もしたまたまアーガー＝ヌーリー＝ハーンが風呂にでも行っていれば、その病人は医者にかかることもなく死なねばならないのだ。というのも、彼の同行なくして男性が後宮に入れる可能性はなかったからだ。これが、後宮と宮殿の鍵番、総代理人であったアーガー＝ヌー

リー＝ハーンの様子だった。

辺りの建物は、国王の身内である夫人すべての間で割り振りが決まっていた。幾つかの建物の中庭には、外に面した部屋もあって、そこにも女たちが住んでいた。父王陛下には80人ほどの妻と女奴隷がいた。どの女性も10人から20人の女中と召使を抱えていて、後宮の女たちの数は500人、おそらく600人には達していた。そして、日毎に夫人や女中や召使たちが皆、自分の一族から多人数の人を入れるのだった。毎日継続的に、後宮内には約8、900人の女性が居たことになる。そしてこれらの夫人たちは皆、後宮の外にも家、特権、家来、つまり女中や下僕やあらゆる生活必需品を個々に持っていて、２人の夫人が家を共有することなど、ごく希にしか見られないことだった。ただし、田舎や地方から召された新入りの妻たちは別で、行儀見習いをする間、夫人たちの手に託され、その後に別々の家が彼女たちに与えられるのだった。

全夫人のうち、子供を持つのは７、８人ほどで、あとの人たちには子供がなかった。（王の女奴隷は、女中頭に率いられて、ある中庭に別に暮らしていた）これらの女奴隷はすべて、トルコマンかクルドの美しい女たちで、トルコマン討伐[18]の折に捕虜になったのだった。彼女たちは、女奴隷だっただけでなく、一時妻でもあった。そして、その女中頭というのは、トルコマンで、アカルバケ＝ハーノムという名だった。（Aqal-bakehあるいはAghul-bagehは王の女奴隷で、エェテマードッ・サルタネ[19]の言によれば、初めはアミーネ＝アクダスが寝所の指揮をとっていたが、後、アカルバケがそれを引き継ぎ、また王の一時妻となったという）情け深く、深い教養のある女性で、女奴隷たちを大変良く管理した。女奴隷に関わる出費はすべて彼女に任され、責任もまた彼女にあった。そして、各人が政府からいくばくか追加手当を貰っていた。

アミーン＝アクダスもまた、別の特権を持っていて、王の小宝物庫を自由にできた。彼女は甥の口添えによって、王の覚えめでたかったのである。この有名な人物はギャッルース[20]出身のクルド人で、田舎の遊牧民だった。彼は、以前王の下で大変可愛がられたジェイラーンの召使で、ジェイラーンの死後、猫番になった。そして、バブリー＝ハーンと名付けられていたその猫の遊び相手として、国王陛下に覚えられた。この甥の口添えで，くだんの奴隷女は出世し、高位に至る

ことになったのである。

さて、アミーン＝アクダス一族の出世の原因となったこの可愛い猫について、説明する必要があるだろう。我々の一生のうちで、これ程幸運な人はないと思われる、この強大な国王も、公正な目で見れば、非常な不運の持ち主といえた。なぜなら、この王は女を愛することを義務と感じて、後宮に種々様々な女性を集めはしたが、女性の天性たる嫉妬と妬みによって、妻子に対する愛情をあらわにすることができなかったからだ。そして、世俗的で贅沢な暮らしに溺れ、王の権威さえも忘れるのだった。この憂鬱な強者の国王は、誰かしら話し相手や聞き手や友人がほしくなったときには、この動物に深い愛情を注ぎ、また自分の家族の誰より、この猫を高く置いたのだった。これは、他の者には命令者然としていなければならない立場にあり、妻たちには睨まれていたせいだった。この猫の絵を、私は王宮の至る所で見たことがある。斑の毛並みの美しい猫で、綺麗で小さな目をしていた。高価で貴重な様々な装飾品で飾られ、素晴らしい食べ物で育てられた。そしてまるで人間のように、召使、責任者、世話係を持っていた。その中で、まさにこのアミーン＝アクダスこそ、「お猫番[21]」であったわけである。

ああ！私の親愛なる先生！涙が私の目に溢れ、王たちの不幸に同情を感じた。そして自分のことも大層悲しかった。世間の人たちが幸福だと思っている、王権、栄誉、財産、安寧、功名心といったものにはうんざりしている。私の思うには、幸福は人類には存在し得ないのだ。あるいは、もしするとしても、へりくだった性格と謙遜と共にあるのだろう。例えば、アルトゥール・バーナーマン[22]の文章の一節を思い出す。「幸福とは何か？それはいかにして手に入れ得るのか、あるいはそれを保っておく最良の方法は何なのか？この問題について、人間は太初から問い続け、その研究に明け暮れ、考え続けてきた。然るに、今に至るまで、正しいと思われる解答を見出だし得ていない。人が衣服を纏う前、人類がこの地上に出現する前には、動物たちがその本能に則って、同じ問いを発していたことだろう。それどころか、悪魔が天上で囚われの身に反発したとき、同じ問いが彼を苦しめていたのだ。アダムもイヴも尋ねたに違いない。きわめて古い問いなのだ。ありとあらゆる人間が、この問題を抱えてきた。そしてこの問題は、この後何百万年も、人々に論じられ続けるだろう。例えば我々は、幸福とは人が赤いネ

クタイを締め、そこにブリリアント・ダイヤのピンをつけることだと思う。アーヴァリン[23]は30年間、昆虫を観察し続けている自分が幸福だと思い、ロックフェラーは、ドルと金集めに費やした30年を幸福だとみなしている。子供たちは大騒ぎすることを、老人は沈黙と平穏を幸福と考える」

「ある人は北極探検に出掛け、自らをありとあらゆる危険に晒して、一瞬ごとに千度も死の影を見る。そんな男の幸福は、困難によって満たされるのだ。またある人は立派なパーティーに行って、御馳走のテーブルの前に座り、味覚を様々な食物で満足させて、『これぞ幸福の至り』と言うのだ。アントニウスは幸福を愛に、ブルータスは栄光に、ジュリアス・シーザーは野心に見出だした。とはいえ、一人目は悪名、二人目は不法、三人目は追放の憂き目を見、三人揃って殺されてしまうのだが。ローマ皇帝マルクス・アウレリウスはこう言っている。『幸福は知的会話や、富や名声、肉欲や快楽にあるのではない。では何処にあるのか？それは、知性の原因となる労働の管理にある』以上のように、幸福観は、時間と空間の相違によってそれぞれ異なっていて、これを一種類に限定してしまうのは不可能である。すなわち、こう述べるべきであろう。『賢人は、幸福とは世界中の人間に利益をもたらす行為にあると考える』と」

例えば、もし、王たるわが父が自分を人類に捧げて、国家の発展と、啓蒙と工業化に邁進していたらどんなにかすばらしかったことだろう。ところが父は、猫一匹に夢中になっていたのだ。父がもしあれほど女好きでなく、この世の欲望に汚れ果てていなかったら。その代わりに、一生かけて国政と農業振興に努力していたら、今日の私たちにどれ程利益をもたらしたことだったろう。そして、私がこの回想の中で、父の猫のことを語らざるを得なくなるのではなく、農民や学者の厚遇や、王としての義務の遂行について書くことができていたら、どんなにか嬉しかったことだろう。父を不幸ではなく、幸福だったと思うことができたら、どんなに今この時が幸せだったろう。けれど、ああ、先生！当時は、誰もが怠慢に溺れ、人間性の匂いなど嗅ぎようがなかったのだ。そして、人々が欲望と悪に浸り切った、救い様のない堕落の時代として何世紀も語り継がれていくことになったのである。

ともあれ、再び猫の一件が奇妙に響かないような物語を始めなければならない。

この哀れな猫の栄光と安寧が頂点に達した後、自分の愛する夫が猫に夢中になってしまったのを知った奥方たちは、嫉妬に身を焼かれ、女性独特の方法と湯水のような金を使って、哀れな猫を掴まえ、深井戸に放り込んで、王たる父のたった一つの楽しみを奪い取ってしまうのである。

ここで、あなたに忠告を一言書いておこう。それは、「嫉妬深い人間は常に心を痛め、その欠点によって、全生涯を絶望のうちに過ごすことになる」ということである。前に読んだ小説で、二人の友人について書かれていたものを思い出したので、ここで書いておくことにしよう。

子供時代に同級生で、仲の良かった二人の娘が、ロシア旅行に出かける。この二人は、どちらも綺麗だった。ロシアのとある美しい町に滞在して、二人は、昼は市内見物、夜は演劇やバレーを見に出かける。この二人は、二つの肉体に一つの魂が宿ったのかと思われるほど、気心が通じあっていた。ところが、一方が素敵な若者と恋におち、婚約してしまう。もう一方は、嫉妬の余り悲嘆にくれる。そして、祖国に帰って結婚式をしようということになるが、その帰路、嫉妬深い娘の方は、友と若者が深く愛し合っているのを知ってその若者を毒殺することを決意し、実行に移す。この若者の急死に人々は疑念をかけ、当局は二人の娘を捕まえる。裁判が行われ、嫉妬深い娘は終身刑となる。

ここで御判断をお願いしたいのは、嫉妬や妬みが人間にとって値打ちのあるものかどうかということである。万物の霊長であり、神のあらゆる特質を有する人間にとって。否！そしてもう一つ忘れてはならない点は、嫉妬深い人は決して目的に到達しないということだ。

ともあれ、猫が消えた後、国王陛下はあらゆる手を尽くすが、良い結果を得られなかった。猫は消え去り、それを霊界から呼び戻すことは困難の極みだった。そこで、猫の遊び相手だったこの子供が、王の覚えめでたく、猫に代わって寵愛を受けて、「マニージェ」という称号を得ることになる。そして猫に払われた敬意が、その子供に二倍の深さで払われることになる。（マニージェ、マリージャク、あるいはマニージャクとは、ゴラーム＝アリー＝アズィーゾッ・ソルターンのことで、彼はアミーネ＝アクダスの甥で王の非常な寵愛を受け、王女の一人のアフタロッ・ドウレと結婚した）

ここで、私の人生の大部分で出会うことになった、この人の素性と容貌について書くことにしよう。この人のことを良く知って、その特性について覚えておいて戴きたい。

この子供は、ほとんど目が見えなかった。というのも、目か常に赤く腫れていたからだ。そのため、宮廷風のどんな衣装、美装を凝らしてもなお、とても汚らしく見えた。色が黒く、顔付きも見苦しく、極端に背が低かった。自然もこの子供に不平を言わせたくなかったのか、口がきけず、その子の言葉は理解できなかった。まったく学問もなく、教育や文明とは無縁だった。2、30人の俗にいうところの遊び相手、あるいは、もっと上等な言い方をすれば「小姓[24]」を持っていた。一日中いたずらばかりして、中庭の回りを走り回り、夫人や客たちを悩ませた。そして、その子に意見する力のある者は一人としてなかった。夏には中庭の埃や石を、冬には雪玉を、花束の代わりに夫人たちに贈った。どの様な荒々しい振る舞いも手控えることがなかった。恥ずべき性格の持ち主で、殺人さえもやってのけた。例えばある日、ふざけてアブドッラー＝ハーンという宦官に向けて銃を発砲し、足に怪我を負わせた。その哀れな人物は、いまだにその子供時代の記念をひきずり、びっこである。この子供の父はギャッルースで羊飼いをしていた。これが、これからのこの回想録の中で何度もお目にかかる人物の性質と家系である。

毎年、春の最初の月から父王陛下は旅行をした。そして春、夏、秋の間ずっと、色々な所へ行幸された。狩猟と乗馬を大層お好みであった。まず、ソルヘ・ヘサール[25]に行って「アーシュ炊き[26]」をされた。それは夫人たちの大変愛好した気晴らしのひとつだった。あなたはきっとどんなものかご存じだろうが、ここに記しておくことにしよう。

庭園内の長い道の一つにテントが張られた。このテントの縦横は20ザル[27]でその二面に沿って大盆[28]が置かれ、そこにはあらゆる種類の食料があった。貴族、大臣は全員座ってこの料理の下拵えをし、準備をする。用意ができると、私の父が最初に手ずから鍋に材料を入れる。その後残りもいれて、炊き始めるのだった。アーシュを料理する間中、踊り子たちは踊らなければならなかった。夫人たちはそれを見物に行き、そのあと戻ってきた。そこへ料理人たちが現れ、料理を分けるのだった。それはいくら食べても飽きることのない、大変おいしい料理の

一つだった。「アーシュ炊き」が終わると、サルタナト・アーバード[29]かニヤーヴァラーン[30]へ行き、そこからポシュテクーフ[31]方面へ行幸されるのだった。

父のもう一つの娯楽に競馬があった。毎年、大晦日の晩に競馬が行われた。それらは最初は娯楽目的で行われていたのだか、最近は王家の儀式の一部となっていて、必ず実施されなければならなかった。勇者たちの試合も同様で、毎年、大理石の王座に陛下がお座りになった後、勇者たちが御前で演技し、レスリングをしなければならなかった。これは見物人も多く、実際大変楽しいものだった。

この種の娯楽は、一昼夜の間、種々様々に夫人たちのためにも行われた。人間にこのように甘く平穏な生活があろうとは、想像することすら困難であろう。どんな不快も面倒も、痛みも困難も、一年中彼女たちと出会うことがなかった。苦労とは何であるかともし尋ねられても、彼女たちは驚くばかりで、答えもせずにじっとしたまま、何のことなのか理解することさえできなかっただろうと私は確信している。そんなであったから、彼女たちの幸運の星が沈み、王が暗殺されて後宮を出た後、短期間に皆が死んでしまって、生き残った者はごく希だったのだ。

さて、前述のあの子供が現れたとき、私はまだ生まれていなかった。あなたに書いたことは、休憩のとき子守が私に語ってくれた物語である。私が大きくなって大体物心がついたとき、この子は成長して10才か12才だった。

ここで、夫人たちの道徳や慣習について少し書くことも必要だろう。それから、私自身の物語を始めることにしよう。

この女性たちは大抵、2、3人が友人同志であった。昼の間はパーティーや「ラースコネ[32]」遊び――ボール紙で種々の滑稽な顔を作る遊び――に費やし、夕食時にそれを話題にして笑い合うのだった。彼女たちは皆敬虔で、厳格に断食や礼拝に望んでいた。いつも服装や装飾で人に勝りたいと思っており、大いに自分を見せびらかして王の目をひこうと努めていた。午後には毎日、2、3時間かけて化粧をし、それぞれ色とりどりの服を身につけ、自分自身をまるで万物の主であるかのように繕い、王に伺候した。しかし王の面前では、その中の一人を除いて、だれもが区別なしであった。この特別の一人は、皆に愛され、極めて注意を引き付ける人物であった。この女性は若く、20才位で、背が高く、黒髪を持ち、色白で優美な顔立ちだった。目が極めて美しく、悩ましげであった。また彼女の

睫はくるりと反り返って、長かった。大変気立てが良く、品行も良かった。陛下の寵愛を一身に受けながらも、謙虚で気取らず、優しく、大変純真で、化粧もしていなかった。彼女の父親はまったく教養のない庭師であった。（ハーノム＝バーシーあるいはバーグバーン＝バーシーとして有名なこの女性は、アクダスィーエ[33]の庭師の娘で、ナーセレッディーン＝シャーの非常な寵愛を受けたジェイラーンという女性に似ていた）この女性を私たちは知る必要がある。なぜなら、彼女に悪意を持ったり、妬んだり、身分上彼女に敵意を表わすことの出来なかった人たちが、王の暗殺後、彼女を告発し、傷つけたからである。しかし私は、彼女が無実であるということを知っている。なぜなら、もし彼女が私の父を嫌っていたのなら、自分一人の特権を好みこそすれ、決して王の暗殺など考えず、自分を落ちぶれさせなかっただろうから。

私はヴィクトル・ユーゴーやルソー並みの文才をもって、この記録を大いに甘美な調子で書きたいものだと切に願っていた。しかし、大変簡潔にしか書けないのは、残念である。

王の後宮の成り立ちは、こういうものであった。私たちが後宮について良く全てを知り、その道徳も熟知したところで、再び私自身の物語へ立ち返るとしよう。

私は７才の時、陛下の命令で学校へ入れられ、先生や後見役[34]や学者が任命された。ここで私の子供時代の尊敬すべきこの先生について、説明の必要がある。この先生は30才位で、ふさふさとした顎鬚を持ち、もつれた眉毛と目が黒かった。ギーラーン出身で、読み書きの能力はそれ程悪くなかった。判事の息子で、後継者とされていたが、父親の死後、彼の父方のおじにその職を横取りされ、彼は宰相の家へと逃げ込んだ。宰相はこの哀れな男を救うため、私の先生に推薦した。

私の後見役は、私の母の親族、つまり祖母のおじであった。このおじはハーンの称号を持ち、毎日の謁見の際には、鎖かたびらと兜を身につけ、金をちりばめた羽を手にして、陛下に伺候した。そして謁見のあとは、家にいて、何もしなかった。この後見役は45才位で、大変威厳があり、尊敬に値する人だった。非常に厳格で、正直者であり、とても長い顎鬚を持っていた。

私は学校に入れられ、衣服を賜り、祝賀会が催された。しかし私は、自分から自由と遊びが奪われたので、大変悲しかった。そして綺麗なおもちゃや可愛い人

形たちと引き離された。何日も先生たちと言葉を交わすことなく過ごすこともよくあり、決して勉強しなかった。やむなく、先生たちは遊び仲間の少女たちに懲罰を加え、叩いたりしたが、私には効果はなかった。私はとても強情で頑固であり、誰にも服従しなかった。そして、何でも自分のしたいようにして、どんな叱責も、重い懲罰も決して気に留めなかった。自分を全知の専制君主だと見なしていたといえる。なぜなら、物心ついたときから、敬意、尊敬、謙遜以外何も経験せず、自分の欲するものは何でも手元にあったからである。そのせいで、私は忍耐というものを持たず、本当につまらないことでくよくよするのであった。

先生は仕方なく、教育を放棄し、物語を語ることにした。彼は一日中物語を語りに語った。そして、勉強はあまり教えなくなった。それにも拘らず、私は彼を困らせることを決してやめず、いつも彼が病気になるか死ぬかして、自分が何日間か自由になり、いたずらしたり遊んだりできることを願っていた。たまたまこの先生は若く、健康で、決して病気にならなかった。ある金曜日に、私は遊び仲間の奴隷の子供たちに次のように言った。「もしあなたたちが私たちの先生を何日間か病気で寝込ませることができたら、私はあなたたちにおもちゃの中から良いのを一つあげましょう」彼らは、相談して私の提案を受け入れることにした。たまたま、土曜日に、私たちが学校へ行ったとき、アッバース＝ハーンという名の奴隷の子供が、火薬を大量に手に入れ、教室の先生の足元に蝋燭を置いた。昼時に私たちが授業から解放されようとしたとき、彼は蝋燭に火をつけた。哀れな先生はそれに気付かず、再び自分の敷物の上に座ったとき、突然火薬に火がついた。衣服はすべて燃え、かわいそうに先生は火傷を負った。

午後は休講となり、私たちは約一週間勉強から解放された。しかし後になって、これが私の命令によってなされたということが発覚した。私は4回ほど掌を鞭打たれ、それ以降もはや先生に対して侮辱を働くという罪を犯さなくなった。この時まで私はぶたれたことがなかったので、この罰によって一週間ほど気分が悪くなって寝込んだ。

休みの間中、私はまったく何も考えもせずに遊んでばかりいた。先生の話を覚える努力もまったくしていなかった。一年がこうして過ぎた。私の勉強の仕方はいつもこんな風だった。公平にみれば、先生も教えていた以上のことは知らなかっ

たのだ。彼の目標は日常生活の諸事を教えることだった。ああ、残念なこと、かわいそうな私、人生の進歩すべき時期に、分別ある先生を持たなかったのだから。今は、文盲の者は無生物よりも卑しいのだと良く分かっているのだが。

「人間には知識がなければならない。さもなくば、心は体の中で、ただの物体である」

進歩とはすなわち、真実と幸福に近づくことである。あらゆるものの真実を知ることが人間の能力の限界を越えているように、完全な幸福を手にいれることも幾分むずかしいので、人はしばしばその存在を否定する。それにも拘らず、人間はある程度まで真実を理解し、幸福を手に入れるのに成功することができる。創造の法則は私たちが数多くの物事の意味を理解することを禁じている。私たちはこの強制的な剥奪に、義務的な剥奪も付け加えられてしまっている。私たちは理解できるはずのものを理解しておらず、それを有する可能性がある快適さと幸福を放棄している。何のために？知識と名付けられた案内人を持ちあわせていないためである。

人間はその弱い肉体でもって、強い体の野獣を怒りの爪にかけ、それに打ち勝つばかりでなく、自然を征服して、砂漠を海に、海を砂漠に変えてきた。海の砕け散る波の上を巡り、高山の恐ろしいトンネルをくぐり抜ける。これ程大きな地球を縦横に、電気と蒸気の巨大な力で旅する。地球上の物質の本質や、諸々の天の星の大きさや動きを理解している。創造の神秘の稀有な様を理解し、人間の贅沢な暮らしの手段を整える。幸福に数えられ、利益の保証とつながるこの並外れた力は、どこから来るのだろう？疑いなく知識からだ。力、富、優れた思想、好ましい性格、いろいろな進歩、これら全てのものは知識の結果である。この事から、進歩を知識の同義語だと見なすことができる。

しかし、ああ、本当に悲しいことに、人間の歴史の中で、知識の扉は女性には一切閉ざされ、女性は自分以上の案内人と教師の存在を決して見出だすことがなかった。このために、私の教養は非常に少なく、結局ないに等しかった。そしてこの永遠の欠乏が私の親友であり、仲間だった。ビスマルクはパリから戻る時、「これほど明白な勝利を自分は持ち帰るのだ」と語り、国会の席では聴衆にこう言った。「我々は学校の先生と共にフランスに勝ったのだ」と。

ある学者はこの演説に対して、「子供の教育と子供たちの性質の強化における教師の影響は確かにあるが、ビスマルクはもう一つの知的な力、つまり母親の影響を忘れ、指摘していない」と言っている。子供は家族の教育が正しい場合にのみ、学校教育を享受するものなのだ。性格や習慣が崩れ、態度や動作が不適当で、魂にそういった精神が刻み込まれてしまった子供は、教師に預けられだとて、何をしてもらうことができようか。

同じ様に、私がここで私の先生を否定したのは故のないことだ。プラトンやアリストテレスを私のギーラーン出身の先生の代わりにしていたとしたら？私のあの怒りっぽい性格、頑固、無関心では、一体何ができただろう？もちろん、その気になれば暴力と恐怖で私を従わせられたのだが、それには私の乳母が同意せず、先生を首にしていたことだろう。

一年間、こんな具合に勉強して、私は８才になった。毎日のように子守や召使や老女中が私の結婚について話しているのを聞いた。彼女たちは私を早く嫁がせて恩賜の衣を授かり、婚礼の菓子を食べたいと望んでいた。私も、完全な自由と独立した家を持てることがこの上もなく嬉しかった。しばしば、おとぎ話の代わりに結婚の話がなされ、将来の生活への忠告がなされた。私もよく注意して耳を傾け、すっかり自分の空想の世界にそれを組み込んだ。中でも例えば、私の将来の夫を幾分見下して、私が彼に比べて優秀で能力があると思いこまされていた。それで、私は想像の世界の中で、よくそのかわいそうな人に対する拷問や苦しみのことを考えていた。これは私にとってお遊びの一種で、楽しみの手段なのだったが、それは不幸にも私の恐れていた通りに、私の頭上にふりかかることになってしまった。

その前年、私の母に男子が生まれた。（タージョッ・サルタネの母トゥーラーノッ・サルタネは、女子と男子アゾドッ・サルタネの二人の母となった）この息子は、とても優しく愛らしく、黒い巻き毛をし、母の情愛を一身に受けた。私は母に対してたいへん他人行儀で、大抵乳母に愛情を傾けていたので、余り母のお気に入りの子だとはいえなかった。また、奇妙な予想と遠大な願望によって、私より男子のほうが重んぜられた。しかしそれは表面に現れることはなく、母の心のうちにしまい込まれていた。それでも私は大変注意深かったので、それを私に

隠すことは決してできなかった。このひいきのせいで私は益々母親から遠ざかり、寂しくなった。時々、自分を最も不幸な人間だと想像して、大層悲しくなった。そして同じ頃から、私は並大抵ではない残酷さを身につけ、狂ったように人生を歩み始めた。このために、私の子守たちまで幾分遠ざけて、いつも恥じて、悲しみにくれていた。

私は嫉妬心というものをまったく知らず、そんな言葉さえ聞いたことがなかった。母が弟にキスし、撫でてやっていると、私の心は震え、冷や汗が額を濡らした。このために私は決して誰も好きにならず、他人にとても辛く当たってやるのだ、と自分に誓っていた。たまたま今まで私のこの信条は残り、よく友人に訳もなく意地悪をして、厄介を抱え込むことになる。しかし考えてみると、私には悪気はなく、ただ子供時代に心に住み着いた強情と反抗心のせいなのだ。そうであるから、人は子供時代から何もかも持つようにせねばならない、一人の教養人として必要とされるすべてのものを。

ちょうどその頃、私に縁談が山と持ち込まれるようになった。しかし父は承知せず、「これはまだ子供で、結婚など無理じゃ」と言うのだった。しかし母が嫌うので、母にはその気持ちは話していなかった。そうこうするうち、ある朝、父の元にいるときのことだった。夫人たちが居並ぶ前に、数枚の大盆が、宦官たちの頭に乗せられて運び込まれてきた。荷の覆いを取り外すと、それは高価なおもちゃや素晴らしい宝石の数々だった。皆は、一体誰のもので、何のためなのだろうと驚いた。しばしの沈黙の後、父君が言われた。「アズィーズよ！これは皆そなたのものじゃ。この娘たちのだれかにつかわしたければ、好きな者にやるがよい！」そして、前もって、私が彼に指名されることになっていたのだった。ところが、私の乳姉妹のひとりで私より2歳ほど年上だった者も、アズィーズの花嫁候補になっていて、その母親がこの少年の宦官や子守を味方に引き入れ、自分の娘を指名することに同意させていた。そしてこの少年もそれを承知していたのだった。

尊敬すべき父の命令が下るや、その少年は指を姉に向けていった。「へへへ陛下！こここの娘を、こここ婚約者に！」父はその少年を抱くと言った。「わがアズィーズよ！そなたの婚約者には、わしは［姉でなく］この娘［タージョッ・

サルタネのこと］が良いと思う。この者がそなたのものとならねばならぬのじゃ」

少年はそのどもった口調で言った。「わわわ分かりました！」

母が伺侯していて、叫び声をあげた。「ああ！私は自分の娘の人生をめちゃくちゃにしてしまいます。決してこの婿に満足など致しません。私の可愛い娘をこんな子供にやるなんて、惜しくはないのですか？両親は知られ、呪うべき姿形をしているのに？」

アズィーズに対するこの厳しい言葉が、父にどんな影響を与えたかは言うまでもない。雷の轟くような声で父は叫んだ。「なんと申した？死にたいのか？わが娘がそなたの思い通りになるとでも言うのか？」

騒ぎが起こり、母は私を苦労して少年の視線から隠した。私はその場に立ちすくんでいた。そのとき私は、母が邪魔をせず、本当に私が少年に与えられればどんなにいいかと思っていた。夫とは何なのか分かっていたわけでもなく、愛情の意味を知っていたわけでもない。ただ私が結婚すれば、母の家を出て、母が弟を可愛がるのを見ないですむということを知っていただけだった。それに加えて、荷物の中にあった人形たちが本当に美しかったので、それから離れたくないという思いで一杯だったのだ。だからすぐにそのおもちゃを欲しいと強く願った。そうすれば、私はおもちゃ部屋に駆け込んで、それをバラバラにしてやるのだった。

私の母の言葉は、少年を大胆にした。「わわわ私はあのむむむ娘がいいいいい！わたしはこここの子はいいいいやだ！」

皆は「おめでとうございます」と言って、それでほぼ婚約が整い、人形と宝石は宦官たちが姉の家へ運んだ。私は怒り悲しんで家に戻った。帰った途端、母が私を呼んで言った。「どうして戻ったの？何のために帰ってきたのです？お父様のところへ行きなさい。もし家に居たいのなら、もうお父様のところへは行っちゃだめ！」

私は泣きながら部屋に戻り、落ちていた・・・（欠語）身を投げ掛けて泣いた。眠気が襲ってきて、こんな夢を見た：広い野原があって、様々な人が散策している。私も宝石を一杯身につけ、豪華な服を着て歩いている。だんだん、この人たちが私に襲いかかってきて、私の装飾品を一つ一つ取上げ、裸にしてしまう。そして私は、隼の爪にかかった怯えた鳩の様に、この人々に捕らえられ、羽を一本

一本むしり取られていく。

恐ろしさに目が覚めて、私は再び泣き始めた。子守が部屋に入ってきて、私の泣き顔を見つけた。ひどく心を動かされて、私をかき抱き、キスして、泣いた理由を尋ねた。私はあの出来事と母の怒り、それに夢のことを話した。子守は呻いて言った。「幸せになるには、これだけでは十分ではないのですね。位が高く、王家の一員で、これ程愛くるしくていらっしゃっても、これだけでは。健全であるためには、本当に多くのことが必要なのですね。私が長生きすれば、あなたさまにお教え致しましょう」そして、やっとのことで私を宥め、遊びに取り掛からせた。私はこの出来事をすっかり忘れた。私はこの夢の解釈と子守の話の意味を、数年後に理解した。それについては、またお話することになるだろう。

同じ頃、ホラーサーンの守衛長[35]が求婚してきて、籤は哀れな私に当たった。父母もほぼ同意し、私は花嫁としてホラーサーンへやられそうになった。しかし、私はそれを知ると泣き出し、親類や父母との離別を考えると不安なので、私をこの夫に渡さないでほしいと懇願した。私の願いは聞き届けられ、求婚は退けられた。

その後、父の身分高い夫人の一人で、自らも王族であった女性が、自分の甥の妻にと私に求婚したが、当時財産がほとんど無く、大した地位にもついていなかったので、母が満足せず、認められなかった。

この様に、毎朝私に花婿候補が現れ、夕方になると去っていった。そんなある日、父の位高い夫人の一人であるアニーソッ・ドウレから使いがきて、私は屋敷に呼ばれた。

ここで、尊敬すべきこの夫人について、あなたに説明しなければならない。この夫人は、アンマーメ[36]地区の農家の生まれだった。父がその方面を旅行した際、この少女に荒野で出会い、幾つか尋ね事をした。そしてその少女はすべてに素晴らしく魅力的な返事をしたので、たいそう父の気にいるところとなった。父は少女を後宮に伴い、前にすでに書いたジェイラーンの手に委ねた。ジェイラーンの死後、その家と家具が少女に与えられ、ジェイラーンに代わって、たいそうな寵愛を受けた。この女性は素晴らしく賢く、人格者だったので、美人でないにも拘らず、第一夫人の地位を得て、最も尊ばれた。当時、彼女は30才位で、中背

で、大変簡素だった。物静かで威厳に満ちており、浅黒いその顔は、普通、あるいは醜いともいえたが、とても権威があった。外国大使の妻は全員、公的な催しに際して、彼女の家に招待された。そしてこの尊敬すべき偉大な女性に子供がいなかったので、私にわが子のように話しかけ、特別な親しみの念を持っていた。この様にして、貴族や大臣や将軍の妻はすべて、彼女の家に呼ばれたものだった。そして、あらゆる嘆願が、大抵彼女の裁量を受けて王の元に知らされ、認められるのだった。

この私の心の母は、身分高いある部族の中から私の婚約者を選んでいたのだった。そしてその日、私を見せるために自分の屋敷に呼んだのだった。部屋に入り、型どおりの挨拶をした後、いつものように私を自分の所に招いてキスをし、色々な話を始めて、遊びの種類のことを私に尋ねた。そして私は、賢明にとても独特で美しい答えをした。時々、子供らしい仕種をして、自分の話を証明してみせたりした。そして私は、大層威厳のある巨体の女性が、そこに座って私の可愛らしい会話に注意深く耳を傾け、笑っているのに気付いた。少しずつ、私はその人とも親しくなり、話し始めた。この間に、8才でとても色白で太っていて、しかし可愛くて小さい男の子が、軍帽と軍服姿で部屋に入ってきて、真っ直ぐその婦人の方に行き、膝の上に座った。私はこの子を見て恐怖の念にかられた。そして知らず知らずのうちに立ち上がっていた。いかに私をとどまらせようとしても無駄だった。そして、大層驚き悲しんでそこから出た。あの快活で楽しい気分は完全に失せて、私は塞ぎ込み、悲しかった。家に帰って、母のところに行った。母が私に何を尋ねても、私は答えの代わりに溜め息をつくばかりだった。最後には自由にされたので、私は事情を乳母に尋ねた。子守は、「いつものように、そのご婦人は息子の嫁選びをアニーソッ・ドウレに頼んだのですよ。それで、アニーソッ・ドウレはこれこれの人［あなた］を選んだわけです」と言った。

先生！あの日あの時から約22年がたった今でも、この事を書いていると、私の中で起こる怒りの震えをとどめようもなく、私はやむなくペンを一時置いて、むやみに熱い溜め息をついているのである。実際、子供が8才で結婚する以上の不幸があるだろうか。その娘の心がその夫を選んだわけではなく、母親や大人たちが空虚で無意味な思惑のために、その人を選んだだけだったのだ。まるで私は生

涯を不幸に呆然と生きてきたようであり、そのすべてがこの暗く不吉な日から始まっているように思える。あなたに何度も繰り返してきたことだが、1つ書いておきたい：私の人生全般に亘って、私は心理的な結果に確信があり、自分に起こることはすべて、いつも前もって分かっていた。その日、ある異常な障害と大きな悲しみが私の内部に起こり、それは今に至っても私を去ってくれない。私は生涯、悲嘆にくれて過ごしてきた。そして、この結婚の結果、大きな不幸が始まったのだということを確信してきた。あの女性と子供のことを考えると、常に頭は痛み、神経は震え、心が圧迫されて、私は涙を流さずにはいられなかった。

2、3日が過ぎたが、私はうんざりして、悲しいままだった。母の親切も、乳母の慰めも、散歩や遊びも、何も私から悲しみを取り去れず、決して微笑めなかった。ついに、私の繊細な気質はこの様な状況に耐え切れず、私は気分が悪くなって寝込んでしまった；女たちの言うところの「風疹」にかかったのだった。この美しい顔は、赤い斑点で飾られてしまった。

私が病気の高熱で眠り込んでいる間にも、母は結婚の話を進めていた。アニーソッ・ドウレが花婿の母側の求婚者だったので、父も同意した。父はこの結婚を認めたくなかったが、承知したのだった。そして、急いで婚約を祝いはするが、私が20才になるまでは結婚させないと決めた。この決定に双方が満足し、婚約を祝った。そして、すぐに準備が進められた。

少しずつ私の病気は軽くなり、良くなっていった。私の遊び仲間を歓迎するために、よく結婚の話が語られた。しかし私は、喜んで話を聞いた以前とは打って変わって、悲しみをもってそれを聞き、答えに出るのは溜め息だけだった。どうして私は悲しいのだろう？私が遊んだり走り回ったり、散歩したりするのを止めてしまったのはなぜだろう？いかに自分に問うても、分からなかった。私は日ごとに痩せていき、目は輝きを失った。

同じ頃、婚約祝いの儀が整えられつつあった。そして私が恐れおののいていた日が来た。家族全員が喜びに沸いている中、もちろん8才の子供にとって、楽器や歌、幸福、宴会、音楽、騒ぎが楽しくないはずはなかった。しかし、私は呆然として、酔っ払いのようによろよろとふらついていた。あらゆる感受性に欠けた人々は、私のこの状態を恥じらいのせいだと考え、大抵喜んだので、私はそのま

ま放っておかれた。しかしこの明らかな悲しみの真の理由は、自分自身さえ分からなかった。主だった貴族の女性や王女はすべて、アニーソッ・ドウレに招かれていた。壮大な会が催され、大きな空間に様々な色と柄と記章が波打っていた。[37] ダイヤモンドの輝きも、それには驚くほどの。

私は離れた中庭に連れて行かれ、化粧をされた。とくに父の夫人の一人が着付け上手だった。この女性の名はデルバル＝ハーノムで、人気が高かった。結婚式で着付けをする度に、陛下から一律に高価な宝石が授けられるのだった。厚化粧と宝石の重さで、私は死にそうだったことをよく覚えている。この不幸な日を、何度も何度も呪ったものだった。同じ年頃の少女たち全員がこの中庭に集まり、楽師と踊り手の小集団が別にそこに連れて来られて、演奏をしていた。音楽が四方から聞こえ、騒音と見たこともない群衆が現れ始めた。約千枚の盆の上に菓子が盛られ、色とりどりの宝石が数枚の金の盆に載せられて、この婚約者のために用意されていた。そして音楽と共に、王族、官吏、貴族からなる見知らぬ人々の一団が、大きな中庭を一回りしてから、私の家にそれを持ってきた。この時、とくにゆっくり静々とこの人々は進まなければならなかった；というのも、到着した物すべてを招待客が見物して、とくに結婚のために何を持って行くのか、この娘はどれだけの価値があるのかを知るためである。かわいそうな私は、まるで捕虜か奴隷のように、宝石と表面的な装飾とで売られたのだ。夫を見たこともなかったし、その品行に慣れてもいなかったけれど、この生涯の伴侶となるべき人を頭の中で受け入れ、自分の想像力でただ夫の名前を膨らませていた状態だった。そして、決して夫の権威の大きさに気付かず、その知識すらなかった。菓子、果物の千の盆や、５、６の金の盆、銀、宝石、真珠、そして封印された紙幣の入った閉じられた数個の封筒の代わりに、私は結婚しなければならない。ああ、何ということだろう！人間の大きな不幸とは、まさしく父母の望み通り結婚しなければならないことである。それは理性に背き、法に矛盾する、大変おかしな事だ。そして、これに関しては、西欧人のほうが正しい。もちろん彼らはあらゆる点で、私たちより知識があり、より進歩しているとはいえ。しかし、どうして私たちが、少なくとも善悪を区別できないほど無知なのか、残念だ。もし自分が持っていないなら、少なくとも他人から教えてもらうべきなのに。人はいつも自分の未来の

ために精一杯努力をするべきなのだ。なぜなら過去はもう過ぎ去ったものだし、現在とは、刻々とその人の生涯を減らされていく瀕死の病人であるからだ。欠点のない性格も、くだらぬ人々との交際が続けば壊れやすい。そして、賢明な人は常に自分の生涯の友人のことを考えなければならない。その人物を十分知って、選ぶ。不幸にならないため、欲望と情欲の犠牲にならないために。

さて、盆は整理され、宝石も保管された。大騒ぎと共に昼食が終えられた後、私は集まりに連れていかれた。金糸や他の装飾で飾られた、金色と薔薇色の服のことを今も良く覚えているが、この服は劇場で踊っていた娘たちの服にそっくりだった。それは短い上着に、何本ものバネで傘型に開いた［スカートの］束が、非常に長くピンと繋がっているものだった。そしてこの服に、全体に銀糸が縫い込まれている薄いレースのチャードルが重ねられていた。頭には、当時の言い方で「カージャール式」が結ばれていた。それは、ぼろ布や糸で帽子のようなものが作られ、大きな人工の耳がその両側につけられた飾りで、表面は宝石で飾られ、その上に輝く黄色の金属片[38]が振り撒かれていた。

おおよそ私は滑稽でおかしい姿になっていた。鏡が私に持ってこられると、自分の姿にゾッとしてしまった。これ程好ましい地顔に、頬紅や白粉を塗りたくられて、私はすっかり別人のようにされていた。例えば、私の眉毛は半分にされ、全体は毛抜きで手をかけて整えられていた。そして一本の弓形の滑らかな線にされ、黒い眉墨が引かれ、滑らかにされていた。顔に大変多くの白粉が塗られたので、自然の陰影はまったく見えなくなってしまい、私の顔は・・・（欠語）にされてしまった。さらに、多量の紅が唇に塗られた。このおかしな顔の前方には千個の火鉢がおかれ、香や邪視除けのヘンルーダが煙をもくもくとあげていた。二人の者に両腕を掴まれた私は、目を閉じ、ちょうど盲人のようにして進まなければならなかった。これは慣習であった。つまり、もし花嫁が目を開いていれば、恥知らずで教養のない者とされたのだ。

最後に、初めの状態のままで父の御前に連れていかれた。父の足にキスした後、恩恵や賞賛の言葉を受けた。そして私は宴に連れていかれ、婚約を祝う金貨銀貨が頭上に振り撒かれて、私は金の椅子にすわらされた。大変おかしいことに、私の両足は床まで半ザル[39]の距離があった。私は小さかったので、段の上に抱え

あげてもらった。不幸の始まりのために行われたそれらすべての混乱の後、一日は終りを告げ、私は苦しい束縛から解き放たれたのだった。

また、この日に、驚くべきことが起こり、それは私にとって大層不快な出来事であった。それは次のような次第だった。すなわち、私の前の婚約者のアズィーゾッ・ソルターンが嫉妬し、自分の行った選択を後悔し、騒ぎを起こし始めたのだ。まず私の父と話し合い、花嫁を交換するよう交渉した。が、父は受け入れなかった。失望した彼は、宴をぶち壊しにかかった。雪玉や氷を尊敬すべき来客の人々に投げつけたので、皆不平を言い、異様な騒動が起こってしまった。この少年は私を好きだと感じていたのだ。大変驚くべきは、彼の容貌の醜さにも拘らず、彼の愛が少しずつ私をひきつけ、ついに妙な喧嘩が起きてしまったことだ。それは、私の責任ではなかった。なぜなら、たとえ子供が賞賛すべき性格を生まれながらに持っていても、父母の真似をしてしまうことは避けられないからである。私の父がこの子供に抱いた愛は、叱責や軽蔑を受けるべき子供じみた愛ではなかった。私は大変厳しく育てられたにも拘らず、時々気紛れで優柔不断な行いをした。そして突然後悔するのだった。それは、私が大変愚かしいために欠点を認めるのを拒絶しているからではない。最大の欠点は、分かっていながらわざとする、というところにあった。このために、私はよく、自分は驚くべき狂人の一種であるといえると思う。この問題が私の内部に第二の性格を作り出したようで、それは未だに残存している。子供時代ばかりでなく今日もまた、私は人々の間で理性と品位と教養において知られているが、この欠点を持っているのだ。そしてしばしば、私の先生よ！あなたはこの気侭な性格を私の中に見出だしていながら、私を非難しなかった。その理由は何なのか、私には分からない。しかし、この欠点を持つようになった理由はよく知っている。ではこれからあなたに説明していう。

この問題の根本原因は、子供時代に私が大変甘やかされて育てられたところにある。例を挙げると、もし私が高価な陶器の花瓶を壊しても、「この花瓶は高価なもので、残念なことをしました。でも、壊したかったのなら、よろしいでしょう」と言われただろう。また、この道具に火をつければ、「残念です。けれどもそれを燃やしたいのなら、構わないでしょう」と言われたろう。他のことについても同様だった。そしてお世辞やおべっか以外の何もなかったのだ。その感情的

で執念深い力は私をすっかり汚染し、利己主義と連結されたのだった。例えばあらゆる王、貴族、長官、偉大な人々が、殺害し、略奪を行い、苦しめ、投獄し、圧迫し、暴挙を起こすごとくであった。分からないからではない。違う、違うのだ。よく分かっている。けれども慣れてしまっているのだ。彼らは、真の教師たる知識や人間性を、哀れな私と同様持ち合わせていなかったのだ。まさにこのために、彼らの大抵が殺されたり罷免されたりし、歴史を野蛮な行為や流血の記憶で飾り、自らの気質を作り上げてきた。そして大変忌まわしい名を自ら残してきた。まさにこれと同じ様に、私はすべての幸福と、自然がその優れた要素を私に用意していた事共をなくしてしまった。そして私は、自分が人生から抹殺され、罷免されていたほうが愉快であったろうということを、どうか分かっていただきたいのだ。

私は自分のことを不運であるなどと言えない。なぜなら、人間の幸せというものは幻であり、空想がちな性格から生み出される幻覚であるからだ。例えて言うなら、子供たちが石鹸の泡から一瞬にして消えてしまうシャボン玉を作るようなものである。しかし、次のようなことは言える。私は、素晴らしい教育を施されはしなかったと。そして教育に値する人間であったから、今日、それを理解して、自分を嘆かわしく、惨めであると感じるのだ。そしてこのために、悲しく人生を歩き始め、悲しいまま死んでいくことだろう。そう！憂鬱と深い悲しみは、人生の一部分である。ノアの子孫たる人類は、常に生じる大きな嵐の中に囚われている。そして、人生は理想とは異なり、逆に忍耐を必要とする。この人生が幸せか否かは、一過性のもので、生きていくには、苦痛を耐え忍ばなくてはならないのだ。人は高慢であったり、傲慢で横柄な態度を示したりしてはならない。同様に、不幸な時にも、誰にも不平をかこつのを聞かせてもいけない。

月日が過ぎ、宮廷の人々は皆、贅沢で楽しく、幸せな世界にいた。しかし私は、いつも塞ぎ込んで悲しかった。そして、ある一つの外部からの出来事が私を脅かしていた。一年がこうして過ぎた。私がとくに述べるべき、新しい事件はなかった。お決まりのプログラムに則って、日々が過ぎていった。

この年が終わってから、両目を失明して１、２年のアミーネ＝アクダスが亡くなった。莫大なその持ち物、財産のすべてが、私の姉に与えられた。（アミーネ＝

アクダスは1311年の陰暦12月［1894年6月頃］に死亡した。実際には、彼女の宝石と金は国庫に没収され、彼女の甥で王の義理の息子であるマリージャク、すなわちアズィーゾッ・ソルターンが、その跡継ぎであった）そして同じ年に、彼らは結婚の準備で忙しくなった。また、同じ時期に、ようやく若者の域に成長しつつあった少年のぶしつけな視線と、慣れない溜め息に、私は包囲されてしまっていた。この少年と話すことは、厳しく母から禁止されていた。しかし、毎日午後には王の元に伺侯して、6時から7時まで一緒にいなくてはならなかったために、視線を避けるわけにはいかなかったのだ。

私はみるみる成長して、美しくなっていた。そして、様々な花で飾られた大変美しい庭園のように、日毎に新しい花を咲かせ、自らの顔に彩りを加えていくのだった。私の母は、とても立派で尊敬すべき人物であった。自分と私と弟を美しい衣装で飾るために、金に糸目をつけることはなかった。毎日いつも、新しい流行の服に身を包み、装飾品の数々で私を飾り立ててくれた。父は洋服、とくにピンクや白のものを私に着せるよう命じた。毎日のように、母は上等の生地のことを調べ、様々な服を私のために仕立てさせて、花で飾ってくれた。私の容貌の美しさは、この哀れな若者を苦しめたばかりでなく、私の周囲のすべてで、こういった溜め息をつく人々が多くあっただろう。そして私は、おどおどした一羽の雀のように、この燃えたぎる火と呻きの中に囚われていた。母は、この大きな嵐のことによく気がついていて、私の日常生活に日毎に新しい拘束を加えていった。そして徐々に私の遊び、自由、散歩、散策が禁じられていき、私は孤立した、囚われの身になってしまった。しかし、父王陛下の御前では、それを禁止できなかった。私に心を奪われている人々は皆、その時に私を見、遠目に見ることだけで満足するのだった。私は自然と悲しげになり、人生に飽いていった。そしてこの悲しみは、私の美貌に独特の魅力と気品をもたらした。こうして私は外見の美を増していった。

同じ年に、姉の結婚式が始まった。そして、この結婚の前に、私の夫の母が亡くなり、一人息子を結婚させるという願いを墓場に持ち込むことになった。私はこの出来事がとても悲しく辛かった。なぜならその尊敬すべき人物の死は、私に不運をもたらし、将来の人生を暗くしてしまったからだ。数か月後、私の夫の父

親は、彼自身と首相の娘の一人との結婚を取り決めた。そして自分の結婚の後、私の父に、息子と私を結婚させることを願い出た。そしてもし結婚の許しが与えられないなら、父がその気になるまで待つと述べた。

結婚の許しが与えられ、式の準備に忙しくなった。盛大かつ素晴らしい支度がされたが、それでも婚約式よりは、およそ人が少なかった。再び、私の頭の中にあの精神錯乱の幻が生じた。そして、外部からの脅威に常に晒され、深い渦の中に落ち込んで逃れる術のない自分に気付いた。とてもひどく泣いて、私を急いで結婚させないようにと懇願した。しかし、不可抗力には抗し切れず、あの手この手の脅しで、私は同意させられてしまった。

私がその日から恐れ、怯えていた日になった。結婚式が始まり、私は真に神性を持つ神々しい父の御前の、礼拝用の敷物のところに連れてこられた。それはまるで神に捧げられた古代の生贄のようであった。数々の宝石で飾り立てられた白い繻子織りの衣装をつけ、頭は婚約式の際に述べた、特別な形に整えられていた。銀の刺繍の施された長いチュールが顔に掛けられ、説教が終わって、私の答えを待つばかりとなった。しかし涙で答えることが出来ず、私は震えるばかりだった。懸命に自分を励まし、陰で大いに叩かれもして、私は消え入りそうな声で「はい」と答え、この混乱と騒ぎから救われた。

婦人たちが、花婿を婚姻契約に連れてくるようにと頼んだ。花婿と同じ年頃の私の二人の弟が彼を部屋に連れてきて、私の脇に向かい合わせに座らせた。私は激しく泣いたために化粧がすっかり混ざり、装飾も掻き乱されていた。そして頭を垂れたまま立ち上がった。しかし向かいの鏡の中に花婿が見えた。公平にみて美しく、醜男の範疇には入らなかった。とても美しい白い軍服を着ており、髪は黒い巻き毛で、顔は白く、上品で快かった。しかし私は、この若者を好きになり、結婚したことを喜ばなければならないことがどうしても理解できなかった。感じることができたのは、極めて圧迫されているということと、想像を絶する心臓の鼓動と、特別な神経の震えがあるということだけだった。

先生！これ程の喜び溢れる結合と叫びと共に、あれほどの激情的な出来事と共に、わが神の御前において、私の囚われと不幸の条約が、この未知で、好きでもなく、性格にも慣れていず、その人生がどんなものかもまったく知らない若者と

の間に結ばれ、彼は私の永遠の伴侶と決められたのだった。人々はこの横暴な出来事を喜んだばかりか、嬉しげに触れて回り、私の不幸を感謝の目で眺めるのだった。

ああ！私の全生涯において何という不運の日、何という不吉な時間だったことか。私は自由と権力を奪われ、嫌悪が私に近づいたあの時を決して忘れない。そしていつもあの不吉な日を憎み、呪いを唱えるのだ。そしてもし公平にみれば、私だけがあの日を憎んでいるのではなかろう。おそらくあのかわいそうな若者も憎んでいるだろう。なぜなら、私たちは幸福において仲間同志であり、協力者であったように、不幸な時も共に過ごしたからである。彼が私を不幸にしたように、私もまた彼に迷惑をかけた。

この自分の将来の夫をあなたに紹介するのを忘れていた。この若者はとても古い貴族の出であり、父方はラシュト出身のヘダーヤト＝アッラー＝ハーンの、母方はアミーノッ・ドウレの親類だった。この子供の父には何人か妻があった。が、男子はなかなか育たず、皆死んだ。そして、この少年は、何人もの子の後ひとり生き残ったのだった。それゆえ、この子に対する父母の愛情がひとかどではなかった事を理解できるだろう。この極めて愛すべき少年は、おそらく両親の支配者であり、領主でもあったのだろう。この息子まで死んでしまわないように、勉強を無理強いすることもなく、やりたいことをさせて、それを認めてしまっていた。朝から晩、晩から朝まで、遊んでばかりいた。そしてこの少年は、多くの子供の奴隷に囲まれていたが、彼らは高位高官の息子たちだった。

彼の父親はとても高貴で、王の側近の護衛長だった。そして王の信頼が極めて厚かった。禁裏も、人の往来も、後宮の内外の警護も、すべて彼の責任だった。とても誠実で正直で信頼できて忠実だった。彼の母親もまた、卓越して高貴で尊敬すべき女性で、とても賢明で博学だった。この母親が生きている間は、彼はすばらしく恵まれた教育を受け、良く保護された。これ程可愛がられた一粒種だったが、彼の教育には欠点や欠陥はなかった。しかし、母親の死後、彼が悲しんで母の死に影響されないようにと、素晴らしい建物がこの子供に与えられ、子守、後見役と下僕が別にあてがわれた。そして9歳頃まで、彼は気侭に振る舞ってきたのだった。

この子供の子守は、私の子守のコピーだった。しかし、この二人の子守の間の相違はといえば、私の子守がとても早死し、私に自分の性格や習慣の影響を与えなかったのに対して、彼の子守は長生きして、何年も哀れな私の迷惑と嫌悪の対象になったということである。そして、自分の野蛮な習慣のすべてを、このかわいそうな子供に教えて、彼を強情で野蛮で血に飢えた人間に育ててしまった。そして、悪口雑言のすべてを彼に教え、自分の永遠の記念に残したのだった。

これが私の将来の夫だった。そして私は結婚後は学校にも行かず、溜め息をついているか、ハーフェズやサアディーの詩を読んでいるばかりになった。子供らしい遊びもある程度やめて、美しい本や甘美な小説を読んだ。私の脳の受容能力は高く、高尚な思考ができた。例えば、いつも注意深く、悲しみをもって自分の子供時代の囚われの状態を振り返り、言ったものだった：人間は自由と人生のために創造されたのに、なぜ囚われ、他人の意に沿って命じられるまま生きるよう運命付けられなければならないのか？人間に優劣はなく、全ての人が平等なのだから、皆が自然から与えられた自由と平等の下に生きることができるはずだ。

例えば、寒い雨の日に、薄っぺらな服を着て、苦労なことや面倒なことをして仕えている召使たちを見たものだ。この人たちは主人たる夫人たちからいつも文句を言われ、理由もなく叱責された。［そんな有様を見ると］私は悲しみに沈み、悩んで、極めて落胆して言うのだった：この人たちとあの夫人たちとに、どんな違いがあるのだろうか？ただ、綿の繻子織りの服を着、この世の恵みを神に与えられているだけではないか。それならなぜ、この人たちが罪人で、あの人たちが判事でなければならないのだろうか。支配するのなら、なぜ人道を守らず、この人たちに慈悲深くあろうとしないのだろうか？もし必要があってこのかわいそうな人々を軽蔑の目で見るというのならどうだろう。つまり、この人たちに服や食物や家が必要でおあるように、あの人たちの貢献、助け、援助を必要としている。人はこの世でお互いを必要とし合っているのだ、一方はお金を、他方は苦労を、と。それなら特権とは何？このあらゆる困難、この全ての下品さは、何のためなのだろうか？わからない！

例えば、なぜこれこれの器を割ったのかだの、水を浪費するのかだのと［目くじらを立てる］。いかに身分の低いものでも、高いものでも、王であれ、大臣で

あれ、夫人であれ、誰もが自分の目下の者に対して義務を持っている。私の言いたいことは、一国、一都市あるいは一家の長たる者は、誰でも特別な義務を負っているということである。できる限り、・・・（欠語）ではなく、倫理を持たねばならない。意思と決意もまたしかり。非常に貴重で重要な力となるのは、熱意と気高さである。この二つは、結果を生みだし、有用とするからである。この二つの特質は、どんなものを生み出すのか？善と公正と義務の遂行を。この二つの言葉より高貴で良い言葉が見つかるだろうか？

人間はこの簡潔な表現を、勇気と心の平穏の極みで、また、必要なときには完全な服従と共に感じる。現実に沿って勇気と心の平穏の意味を説明することは不可能だ。我々は、義務の美徳を自分の良心のうちに見出だすものだ。ただ、この様な考えの反論としては、次のような言葉がある。「法則と良心という観点から見ると、義務とは我々がその遂行の責任を負っているもののことである」あるいは、以下の言説を信じることもそうだ。「常識が確かにその存在と確実性を・・・（欠語）する法則は、我々の倫理と習慣に拠って立つ行動である」またもや我々は、義務のより高尚な意味を適切に理解できなかったわけである。

人間は義務という概念には無抵抗である。公正で人の上に立つ人物は、いつも義務の遂行の心構えを持っている。義務の遂行は大抵、それを認知することより容易であると言える。・・・（欠語）と義務の確認は、絶対必要な強制力を持っている。この義務や責任のうちで法律が規定するのは、政治的な初歩的義務で、それは人間社会の存在のために是非実行されるべきものである。例えば、人を殺さない！他人に属するものを横取りしない！もし結婚しているなら、配偶者と正しい行いをし、自分の子供たちを教育する！

この法の命令は、丁度誰の目にも明らかな初歩的ともいえる誠実さ以外の何者でもない。しかし倫理は、法がそれを知らず、また実行を強制することもできない、より高尚な義務の大部分を説明する。それにも拘らず、我々に対し、一つの義務の法則が示されており、それは他人に相談する必要なしに我々の行動の指針となるために、その命ずるところを非常に明白に我々の良心と精神に教えている。義務の認識やその理解力において、人間はどんな障害に会うのだろうか、義務を打ち負かすものは何であろう？それは気紛れで、怠惰で、だらしない下等な人間

である。・・・
（一ページ欠）
なぜなら、この青年が望むことは何でも、すぐ用意されたからだ。ついに劇場の開場が予告され、おかしな騒動が起こった。皆が皆、このことを喜び、他の楽しみに加えて、新しい娯楽ができたことを歓迎した。
毎日、午後には、私は花婿が送ってくる５枚の無料券を手にした。そして、苦労して母から許しを得て、出掛けることもあったが、許しの貰えなかった夜には、他の人に譲ることになった。
私が朝目を覚まして、まず頭上に見えるのは、色々な花で一杯になった優れた陶器の花瓶だった。それは毎日、限りなく新鮮な色彩と香りと共に私に送られてくるものだった。そして大抵、花婿が書いた、非常に小さな手紙があり、それには芳香と美しい花が付けられていた。手紙の文面はとても簡単で上品であったが、少しも・・・（欠語）側からは・・・（欠語）同じような伝言で済ませられていた。
５、６か月がこのように過ぎた。この頼りない哀れな青年は、いかなる方法でもってしても、少しも私と言葉を交えることができなかった。そして私のほうはそんな世界のことは何も感じなかったし、目的が何なのかも分からなかった。また、人形や人形遊び以外の何ものにも気付いていなかった。そうこうするうち、ある暖かく穏やかな春の一夜、庁舎は締め切られ、[40] 私は散策のため王に伺候した。その晩は、アバディー＝ハーンの一座が後宮に招かれていた。
もちろんアバディーのことはよく覚えておられると思うが、私も彼の顔や性格を説明しておこうと思う：彼は12、３の少年で、悩ましげな、大きく黒い目をし、非常に美しく健康だった。綺麗な浅黒い顔色に薔薇色の唇をし、黒く豊かな巻き毛を持っていた。そしてこの少年は町中の人気者で、多くの人が彼に恋焦がれていた。しかしダンサーだったので、特定の人の恋人になることは出来なかった。
日が暮れて１時間ほど経ってから、父は「食事部屋[14]」へ行った。父が食事部屋へ行くと、全夫人が夕食のために自分の部屋へ戻り、宵のうちに夕食をとった後、父に伺候しにくるのだった。毎晩、前日よりもっと様々な趣向を凝らして、散歩や音楽や歌が行われた。日が暮れて２、３時間してそれは始まり、大体７時

か8時に終わった。この夜、私は母から許可を貰い、子守、老女中、乳母、それに父の夫人と中庭で夕食を食べてから、家へ戻ることになった。父の夫人の手を取り、大きな池泉のそばの、何種類もの明かりが飾られた明るい場所に座り、父の夕食の一部を女奴隷の一人が取り分けてきたのを少し食べた。それから散歩に出かけ、長く広い通りに歩を進めて、歩き始めた。私たちの連れは、座っていた場所で夕食を食べたり、おしゃべりするのに夢中だった。

私たち二人は若く、つまり私はまだ子供で、彼女は娘に数えられたのだが、この夜の絶対的な沈黙の中、軽やかで確実な足取りで、小石の上を歩いた。月が見慣れない輝きで光を撒き散らすのを眺めながら、私たちはそれぞれの思いに浸っていた。この通り一帯に沈黙が満ち、物音ひとつしなかったので、微かな動作や音をも反響されるほどだった。また、そこを支配する沈黙は、森羅万象が眠りにつき、死という兄弟の枕元に頭を並べているかのように思えたほどだった。夜の暗闇がこの静けさに協力し、思索と恐れに拍車をかけた。耳を四方に傾けてみても、鼓膜のはためきに失望し、戻ってくるのだった。ただ、夜の微風の穏やかなざわめきに、木々の枝の振動のみが反響し、時折、一連の静けさを破っていた。

見物人の慰めの拠り所となるのは、たったひとつの景色だった。それは、星々の輝きが青い天の逆さのドームの中に不規則に撒き散らされて、月の穏やかな光が木々の葉の隙間から地面に落ち、ある恐ろしい状態を作り出したものだった。生い茂った木々が暗闇の上に恐怖を増し、闇は悲しみをもたらし、この影を二倍にしていた。

とうとう、木々の間から聞こえた微かな音に私は怯え、この若い女性の腕にしがみついて言った。「ああ！もう戻りましょう。子守たちのところへ帰りましょうよ！もう半時間も歩いているから、遠くに離れてしまったわ。あの人たちは私たちを探していることでしょう。私たちが急にいなくなったことを何と言うかしら？早く、早く戻りましょう。私はどうしてだか震えているわ。ああ、神様！私はとっても臆病なのかしら？夜の静けさが怖いのかしら？いいえ、違います！そんなものは怖くない。私が急に居なくなったことで迷惑をかけたり、叱られたりするのが恐ろしいのです」

その若い娘は微笑んでいった。「あなたが今夜ここで夕食を食べられるように、

私がどれ程骨折ったか、お気付きではなかったの？」

私は「それはもう」と答えた。

「何のために私がこんな辺鄙で暗い通りを選んでやって来たのか、お気付きではなかったの？」「いいえ！」

彼女は手を叩いて突然立ち止まり、こう言った。「私は重要な問題についてあなたとお話がしたいのです。もしよろしければ、通りの横のベンチに座ってお話しましょう」

私はとても驚いて言った。「そのお話って、こんなに長く歩いて、暗闇の中に隠れて、注意して自分を隠し、困難に巻き込まれるに値するほど重要なのかしら？」

彼女は指を口に当てて私を黙らせ、長い溜め息をひとつついていった。「そうなのです！この話は大切で、ゆっくり考えるべきものなのですよ。そう！この話は、悲しみに汚れ、恐れるに値します。私が10日間あなたにお話する機会と勇気がなかったくらい重要なのです。そして、誰にも言わないと誓っていただかなければなりません。そうすればお話しますし、さもなければ、私たちはもう戻って、言わずにおきましょう」

私は言った。「分かりました！行きましょう。行って湖のそばのあのベンチに座りましょう。明るいし、もし誰かが外から来たとしても見えるし、私たちの話も聞くことはできないから」

彼女は同意して歩き始めた。この会話は私の想像力の推積に稲妻のように激突し、種々のつまらぬ考えを私の心にもたらした。夜は、本来空想を引き起こすものである。空間の関係もまた、それをいや増す。この状態で果たして思考の範囲を限定できるだろうか？いや、決してできない！常なる恐怖と不安定、絶え間ない恐れと動揺、期待と恐怖の平衡は、互いに相反する二点であり、人生の基本に数えられる。その様な状況で、ベンチの近くに来たので、二人とも座った。しかし、私が聞こうとしているこの話は、ごくありふれた話ではないと感じていたので、この驚くべき話を聞く用意をするために、勇気と力の助けを求めなければならなかった。

私は言った。「私は聞く用意ができました。言ってちょうだい」

彼女は・・・（欠語）に満ちた目で私を見て、言った。「少しでも気付いてお

られますか？」

「何に？」

「長いあいだ、あなたの回りを蝶のように回っている人のことに」

「いいえ！あの人って誰なのですか？」

「生涯で、あなた以外には何一つ望んでいない、あの迷える若者です」

私は尋ねた。「その若者の目的は誰なのです？」

彼女は笑って言った。「ああ！ああ！知らないふりをなさるのですか？あなたがそこまで察しの悪い方だとは思えません。そうですとも！よく分かっていらっしゃるんでしょう。なのに気付かないふりをしておられる」

私は驚いて彼女を見つめ、言った。「何ですって！私に何を教えるつもりなの？あなたの知っていることについて、私はなにも知らないし、あなたの目的が何なのか、全然わからないわ」

「仕方ありませんから説明しましょう」

「お願い！」

「この若い、哀れな、迷える男性は、母親からあなたのことを止められていますが、今、死ぬほど苦しんでいます。あなたのことを本当に心からお慕いしているいるのです。あなたに彼の愛を伝え、この哀れな者をあなたがお助けくださるようお願いするようにと、私に縋ってきたのです。そしてまた、私に、あなたが彼の愛を考慮してくださる気があるか、そして彼に好意をお持ちかどうか、確かめてほしいと」

私は叫んだ。「なんということを！あなたはどういうつもりでその役目を引き受けたのです？どうして私にこんな話をしたのですか？おわかりでしょう、私はあの厳格な母と、あの偉大で全能な父の保護の下にいる身です。その上、偉大な父の代わりに、別の人に自分を委ねてしまっていて、今はその方のものなのです。私には何の力もありません。哀れで無力なのです。それに、私は愛情というものが理解できないのです。だって、二人の方しか愛したことがないのですもの。母と父を愛していますし、この二人のほかには、誰も愛さないでしょう。ああ！ああ！どうか私のこの自由のきかぬ状態と、今の話と、汚された考え方とで、私の心の自由が失われてしまいませんように！ねえ！お願い！私をそっとしておいて

ちょうだい。惑わさないでちょうだい。そして今の話をもうおっしゃらないで」

彼女は言った。「この事を申し上げたのは、他でもありません。もし、あなたも彼に好意をお持ちで、彼への愛を約束なさるなら、彼はあなたの婚約を無効にし、彼自身があなたを妻にすることができるのです」

「そんな事、できはしないわ。だって王であり力のある私の父は、決してそんな措置をお取りにならないでしょうから。なぜなら、王とは約束と正直さによってのみ、力を得るものなのだから。それに、私の姉とその若者の婚礼の日は、もうすぐです。私に代わって、こう伝えてください。『私はこのことに同意できません。この問題を決して誰にも言わないでください』と」

こう言った後、私は立ち上がって、彼女に言った。「行きましょう！」

死のような完全な静寂が訪れていた。私たち二人は、それぞれ物思いに耽りつつ、とてもゆっくりと通りのほうへ向かった。辺りから、草木の花が盛んに良い香りを振り撒いていた。涼しく穏やかな微風が、驚きに燃えるように熱い私の顔に吹きつけていた。深い穴に落ちてしまわないように、足元に気をつけていた。綺麗な色の花々が、その上を覆っていて、ちょっとつまづいたらひっくり返ってしまいそうだったからだ。一連の新たな思いが胸中に生まれていたが、それは恐怖を欠いた思いではなかった。私は少し胸が締め付けられるようで、動揺していた。自分には、彼を止めるために何ひとつできなかったからである。

そうして、何分か後に、召使たちが待っている場所に着いた。子守は、私をとてもやんわりと優しく非難した。「あなたがおられないから、庭園中を探しましたのに見つかりませんでした。どこにいらちっしょったのですか？お母様が来られましたが、あなたに会えず、とっても御機嫌を損ねておいででしたよ」

私は急に腹がたって、体が震えるのを感じ、言った。「湖のそばにいたのよ。あの女性とベンチに腰掛けて、月を眺めていたのです。ここからそんなに遠くではなかったわ」

そうこうするうち、父が「食堂」から出てきて、とても快活に機嫌良く散策し始めた。私のそばへ来ると、私のことを大変気遣ってくれ、大きなガスランプの灯りに照らされた私の顔や服をじっと見詰めた。その後、私に金貨を何枚か与え、私に同行した夫人と話し始めた。

その間に、アズィーズ＝キャルデ（ゴラーム＝アリー＝アズィゾッ・ソルターンのこと）も一方から現れて、まっすぐ父の面前へやって来た。敬ってお辞儀をしてから、こう申し上げた。「楽人たちの用意ができましてございます。お連れしてよろしゅうございますか」

父は言った。「連れてきなさい」

彼は戻るときに、愛情溢れる深い一瞥を私に送った。とその拍子に、王の庭番がお金と大変な苦労をかけて育て、温室から優雅に包んで献上した花束を下へ落としてしまったので、彼は恥じ入り、悲しみながら遠ざかっていった。私も父と一緒に見物席へ行き、各人が水ギセルのおかれた椅子に座った。

私は椅子に座った途端、考えに耽ってしまった。頭を背もたれに凭せ掛けて目を閉じると、考えごとで頭が一杯になった。そう、その時絶望の岩場が、公衆の面前から私の傷付き、血まみれになった心を隠し、希望の光は、冷えきった熱以外、そこに残されていないのであった。そして私は、言葉にすることの出来ない悲しみに浸っていた。私は、悲しみに満ちた静かで穏やかな生活を保ち、心を掻き乱される事なく、昼夜を過ごしていた。しかしこのとき、単調で静かな私のこの生活の中に、奇妙な混乱状態が生まれた。そして、何千もの恐ろしい幻覚が、私の想像の中で行き交っていた。湖の水面のように清澄で明るかった、清らかで若く初々しい私の心は、この会話に非常な立腹を覚え、どんな治療も慰めにはならなかった。死んでしまおう、と絶え間なく思った。［私があのとき聞いた］言葉は、私の耳には大変耳障りで、聞くに耐えないものと思われた。そして、大好きだった父の夫人に対して、奇妙な憎しみを心に抱いた。もう一生、彼女とは話をしたくないと強く望んだ。このように思考と悲しみの海に溺れ、自分の幻覚が計り知れなく不安で苦しいと感じている状態のとき、愛情のこもった唇が私の顔にキスしたのを感じた。目を開けると母がいた。楽の音にも似た美しい調子が耳に届いた。彼女は言った。「かげんが悪いのですか？頭痛でも？」

私は立ち上がって、母の手にキスをしていった。「いいえ！私は元気ですわ」

「ではどうしてお顔の色が悪いのかしら？」

母を見つめながら私は言った。「とんでもない！私は本当に心から浮き浮きしていますことよ」

「良かった！それなら座って。御覧なさいな」

この優しく甘い声は、私の幻覚の辛さを減らしてくれた。そして、寂しさと悲しみをある程度取り除いてくれたので、私は見物に集中した。しかし、背後で常に足音が聞こえるので、振り返ってみると、あの若者が私の周囲を歩き回っているのが目に入った。燃え上がる炎のように私に影響を与える、優しさと愛に溢れる彼の目が、私の目と出会った。私はすぐにうつむいて、考え事に熱中した。私はその夜まで、これほどまでの痛みと苦しみを味わったことはなかった。この若者の視線は私を中毒させてしまっていた。そして、ひとつの・・・（欠語）が混ざった死への提案が私になされていた。私はどんな時でも、この若者を見ることに恐れを感じたことはなく、いつも自由に彼を見ていた。しかし、この夜から、彼を見ることに対して、非常な恐怖を感じるようにしなり、知らず知らずのうちに、視線を彼の顔にやらないように気をつけるようになっていた。それは、大きな稲妻と嵐が、私の存在の中に出現し始めたのを感じていたからだった。

私の側に座っていた父の夫人は、繰り返していった。「おお、某さま！ご用心、ご用心！なぜその様にお顔の色が悪いのです？どうしてそんなにご自分を見失われているのですか？悲しくていらっしゃるの？」

私はその質問には答えず、自分の考えに浸っていた。そうこうする間に、あの若者が、沢山の花束を入れた花篭を手に持ち、夫人たち皆に一つ一つ手渡していた。そして私の側へやって来ると、立ち止まり、やっと聞き取れる声で言った。「ああ、わが月よ！この花束を受け取って、常に私とは反対に動いているところ[42]に置かれますよう」

彼は花束を私の手に渡した。私は驚いて、無気力な狂ったような一瞥をこの若者に投げかけ、言ってやった。「私にお話しかけにならないで！」

彼は、「承知致しました」と言うと、手に持っていた色とりどりの花をひとつかみ、私の足元に撒き散らして去って行った。

ああ、先生！あの時の私の気持ちをあなたに書き表すことは、とうていできない。私に分かっているのは、この花束が私の手の中でとても重くなり、地面に落としてしまったということだけである。そして私は、周囲が火に包まれた荒野であると想像し、時折、炎の中から恐ろしいガラガラ声で私を招く怪物の姿を見た

りした。また時には、同じ様に、自分が拷問に苦しめられていると想像もした。私は両目を閉じて、椅子に深く腰掛けた。突然、誰かがこう言うのに気付いた。「まあ、不注意な！なんてお考えがないの！」

見ると、父の夫人がその花束を拾いながら、私にこう言っていた。「あなたさま、いかがなさいました？なぜ花を投げ捨てられたのですか？あら、まあ！見て、見てください。これは花束に付いていた手紙かしら？この花を他の人が見るとは思われませんこと？」

ああ！哀れな私は、困難から解放されないうちに、さらなる困難に巻き込まれてしまったのだった。そしてその夜、私は余りに多くの予期せぬ出来事に遭ったために、目の前に血のように真っ赤な火鉢がちらつき、そして混乱と胸騒ぎで止むことのない動悸が起こる私のこめかみには、気の狂う直前にみられると同じような、痛々しい憂鬱が感じられた。私の両耳は絶え間なくガンガン音がした。血の嵐が私の頭の中で火のような痛みの波を繰り返し、内部のこの様な激しい変化の中で、繰り返し一つの言葉が耳に聞こえるのだった。「さあ、この花束を受け取って、常に私と反対に動いているところに置かれよ」

その花束を受け取って、見た。花の間に、一枚の小さなカードが入っていた。それには二語だけが書かれていた。「あなたを愛しています」

その夜「愛」という言葉を聞いたのは、これが二度目だった。その語り手は、私の父母ではなかったが。この言葉は私には大層不馴れで、嫌なものだったので、まるで死刑囚の目に映ったギロチンのように思われた。

そのカードを破って自分のポケットに隠すと、私は見物を続けた。この美しい音楽と楽しい余興も、私にとってはまったく退屈なものだった。私は早く家に帰りたくてならなかった。この騒ぎと人込みから離れて、考えたかった。とくに自分自身のことと、今夜の重大な出来事について。

余興がやっと終わり、私は家へ帰って来た。その夜が、初めての眠れぬ夜となった。そして、快くあどけない甘い眠りが、禁じられた苦しいものとなった、最初の晩であった。私は消えることのないある問題に悩まされ続けるようになった。ついには、私は力の及ぶかぎり、父の夫人が私と二人きりで話す機会と暇を与えないようにした。再びこの話を聞くことのないよう、私自身、極力用心したのだ。

何日もの昼と夜が、電光のように素早く過ぎ去った。その間に華々しく私の姉の結婚式が行われた。私は11歳の少女になろうとしていた。しかし、この愛情は私の沈黙と冷淡さと凍結のすべてをもってしても、この若者の中で薄れていくことはなかった。それどころか、彼は決してそれに倦むことがなかったのだ。そして、次々に口実を見つけては、従順と服従と愛情の念を私に示すのだった。そのうち、私もまた、少しずつ自分の中で、心に動揺が起こっているのに気付くようになった。確かに、時々私はじっと彼を見詰めるようになっていた。彼の顔は美しく愛らしくはなかったが、その視線は毒矢のように私の心に影響を及ぼし、それから逃れることは不可能であった。自分もまた、彼を見たいと感じるようになっていた。もし偶然にある日、私が王に伺侯していながら、彼がいないと、まるで何かなくしたものがあるかのように思えたものだった。時々、あまりに彼を見るのに夢中になってしまって、私の周囲でどんな話題があがっていても、聞いてはいなかった。私は「宮廷の父君の御前には、誰がいましたか？どうなりましたか？」と聞かれても、大抵ちらりとその人を見てから言うのだった。「分かりませんでしたわ！」実際、私は理解していなかったのだ。なぜなら、ある一点に私の注意が傾いていたから。しかし、彼と話す機会は全くなかったし、また彼に手紙を書くことも不可能だった。そしてまた、私はあなたが好きだ、とも一度も言いはしなかった。なぜなら、私には、この言葉の持つ意味が分からなかったのだ。私は、ままごとで、人形の結婚式を厳かに始め、父王陛下から結婚の費用として、金貨百枚を頂戴して、完璧な嫁入り道具と持参金として、花嫁に持たせた。この結婚式の間で、この若者だけが、私に手紙を送ることができた。その手紙の中で、彼は自分の嘗めてきた、そして嘗め続けている苦しみと責め苦を訴えていた。

この結婚式の後、父は旅行に出かけ、４、５か月外国にいた。そしてこの間、私はこの若者に全く会わなかった。というのも、彼もまた随行していたからだ。そして私はとても辛かった。なぜなら、父の夫人で私ととても仲の良い友人も一緒に出掛けてしまったからだ。しかし、私の弟が小さかったので母は行かず、後宮の残りの人たちと共に市内にとどまっていた。何か月かして一行が帰国したとき、私は大好きな父の夫人に会えるのが本当にうれしかった。彼女は私に、遊歩道やこの旅の楽しさ、新鮮さを語ってくれた。最後に、彼女は私に血の染みの付

いた白いハンカチを渡して、言った。「これは、あなたに贈られたお土産で、こんなことづけが付いていました。『このハンカチは涙で汚れています。そしてこの血も、彼が極めて淋しかった時、自分の手を傷付けて出したものです』」

私は大変驚き、この恐ろしい品を見て、極めて動揺した。そして、数か月ぶりにこの若者を見る夜となった。この旅行中、この不幸な若者は、突飛な行動をしないよう自分を抑制することができなかった。夫人たちのほとんどは、この問題を見抜き、気付いてしまっていた。そしてこの話題は、段々に騒ぎと混乱を起こしていった。しかし、父を恐れて、この事を申し立てようとするものはなかった。ナーランジェスターン[43]にオーケストラがやってきていた。夕食後、夫人たちは皆、そこへ集まっていた。とても爽やかで快い夜だった。私は父や社交界の面々に会うことがとても嬉しかった。というのも、父の不在の間は一日中ずっと退屈に過ごしてきたし、何一つ気晴らしの方法がなかったからだ。夫人たちはみな嬉しげに笑いながら散策していた。オーケストラは演奏をしていた。喜びと陽気さがドアや壁からも漏れてきていた。皆は幸せで楽しい気分を共有していた。

そこへ件の若者がやってきて、皆の面前で立ち止まった。私に快い挨拶をしてから、彼はこう言った。「ああ、王女さま！あなたさまにお分かりいただこうにも説明のしようがないのがとても残念です！と申しますのも、海岸まで続いたこの美しい旅に、あなたさまがいらっしゃらなかったからです。でも、あなたさまは目の前にいらっしゃらなくても、いつも私の心の中にいらしたし、あなたさま以外は誰もいなかったということを、どうかお信じください」

彼はその後、敬意に満ちた美しい挨拶をし、遠ざかった。そして私はその場に驚いて立ちすくんでいた。このとても簡素で明確な言葉が私に奇妙な影響を及ぼしていた。私にはもはや何も見えなかったし、聞こえもしなかった。私は壁に寄り掛かり、顔を手で覆った。しばらくして気分が少し良くなってから、私は彼が遠くからではあるが、私と向かい合って、だいだいの木に寄り掛かり、私のこの混乱に満ちた心の嵐を眺めているのに気付いた。そして彼は、彼の怒りと復讐を受けるべく、自然がそこに置いていた小さなだいだいの木の葉を、荒々しく引き抜いていた。

この会話と気分の変化は、すぐさま夫人たちの間に広まり、皆が噂話を始めた。

私は周囲から弾丸のように降り注ぐ視線の重荷に押し潰されていた。どこを見ても、詮索と好奇心をあからさまにした、驚きに満ちたまなざしに出くわした。

私のその晩は、楽しかった始まりとは裏腹に、再び悲しみと苦しさに沈んだ。そして私は、刻々、私にとって未知の新しい苦労にぶつかるのだった。そして同様に、私の相手側の苦しみも、私の苦しみより少ないわけではなかった。その夜も同じ様に過ぎた。

丁度その頃、私の夫の家族側から、私との結婚の許しが父に求められた。そしてこの事は、この若者にとっては我慢できない悲しみであった。しかし、父は結婚の許可を与えなかった。そればかりか、立腹して、「これはまだとても小さい娘じゃ。後送りにせよ」と言うのだった。この結婚許可の申出には、理由があった。というのも、その翌年が即位五十周年記念の年だったからだ。そして、この様な大きな祝祭においては、もちろん、各人に応じた特権や地位が加えられるのが常であった。そして始めから、特別の出世と無限の権利を得るために、［義父は］私を息子の嫁にとるつもりだったのだから、結婚にはこれより良い時期はなかった。というのも、新婦は王の愛娘であるから、舅が望むどんな事も、すぐさま叶えられないはずはなかったからだ。そして、書き落としていたけれど、私の婚約式が行われた際、私の義父は「最高の司令官」という称号を与えられる栄誉に浴していたのだった。当時、称号は一般に高い地位を意味するものだった。「完全な、第一の司令官」である。

人々が私たちと結婚したり、息子の嫁にした、その本来の目的は、自分たち自身にあった。つまり、王族の娘を家に持つことで、他人の財産や生命や名誉をどんなに侵害し、違反しても処罰されず、許されようとせんがためである。哀れな私たちは、そんな人々の武器であったが、結局その武器を、自然は我々自身に向けたのだった。私はしばしば考えるのだが、人は眠っているとき、どれ程不注意であることか、またどれ程神から離れ、なんと奇妙な願いや希望に苛まれていることだろうか。そして人は決して出来事や運命に満足することがなく、自然に常に向かっていくのだが、自然が何もかも思い通りにするがために悲嘆と絶望の砂漠に取り残されるのだということを知らない。

人生とは、はかない希望と願い以外の何なのか？アラブの詩人に通じているあ

る哲学者は、「人生とはすべて、苦痛と苦労である。そして私は、それに驚きはしない。不幸に満ちたこの人生を、もっと続けたいと願う者がいないかぎりは」と語っている。少し考えてみれば、これが夢想でも、大言壮語でもないとわからされることになる。一日、一時間として、多くの証拠や証人を示して、それらの正当性が我々に証明して見せられないときはない。だからこそ、多くの人が、人生という戦場で熱っぽく運命を探求してきたのだ。夜も昼も、電光石火の馬に乗る努力をし、苦労から安寧を、困難から幸運を、危険から安全を求めるのだ。そうだ、この抵抗や自殺や帰還は、世界が成り立つ基礎なのであり、創造という工場の業務管理の第一原因なのだ。もし人類の絶え間ない戦いがなければ、世界の秩序の糸は互いに切れていただろうし、世界の生物は進化しなかっただろう。凡人の中から優秀な人は出ず、美醜は区別されなかっただろう。

人類の初期を考えてみれば、奇妙な人間が見出されよう。彼は、荒野で腹を空かし、裸でさまよっており、どこへ行き着くあてもない。苦難と貧困がその行動に滲み出ている。絶え間なく、彼は何かを手にいれ、灼熱した窯のような胃を、その食べ物で満たそうと考え続ける。そして、山の裂け目や、洞穴の入り口、岩の避難所に隠れ、夜を過ごす。常に獣を恐れ、震えている。獣は自然に与えられた毛皮を着ているが、彼は裸だ。獣には武器となる爪や牙があるが、彼には防御のための武器すらない。獣は群れて行動するが、彼は孤独だ。この孤独と恐怖の中で、彼を被害から守るのは、ただ彼の思考と策略の力のみである。恐れや敵意の問題が失せるやいなや、私たちは気付く。同じ人類が、武装して、争いに頭を擡げるのに。宮殿や建物が建てられ、地の糧を占有し、地平線を限り無く占領し、海上や空には飛行機が並ぶ。こうして人は、自然の潜在力を服従させてしまったのだ。この様な能力の持ち主である人間は、果たしてあの下卑な、荒野で獣と共に時を過ごした無力で惨めな人間と同じ人なのだろうか。もちろん同じ人間だ。人は困窮のために死の淵に達し、必要というしつこい敵がその無力さを増加させた後、能力と体力の限りを尽くして、解決法を追求したのだ。そして長い長い歳月の間、この方法で努力を続けた結果、簡単な文明の始まりが現れ、そして次第に今日の地点にまで到達したのだ。

それならば、今日、私は人間の野心や強欲に驚くべきではない。人は、与えられ

るものの範囲が増すほどに、要求をも増やしていく。どんなに楽しく、贅沢な道を辿っていても、より以上のものを求める。雀をも食料とし、助けを求める雀の叫びには、耳をかさない。人間は乳離れしていない小羊を殺し、空飛ぶ鳥や海の魚を取って、自分の成長のために消費していく。動物はおいしいエサや水のある牧草地で、牧草を見付けたとき、互いに争い、喧嘩する。もし、政治や支配のために花嫁を選ぶのなら、王家の娘を貰っても不思議ではない。しかし驚くのは、どんな時も人がその目的には辿り着かないということだ。この哀れな人[44]も、自分の最終目的には辿り着かなかったようだ。そして、一つの思いがけない出来事が、彼のあらゆる思惑をずたずたにした。それは、翌年起こった父の殺害であった。

[つづく]

訳注

(1) 書写者による但書き。なお、以下の暦日の記述は、特に言及されない限りイスラーム太陰暦による。

(2) Anjoman-e Foqol va 'Erfān.

(3) Madraseh-ye Siyāsī. 1901年にモシーロッ・ドウレによってテヘランに開かれた王立学校。

(4) Madraseh-ye Sanāye'-e Mostazrafeh. 1911年、教育省の指示によって設立された美術学校。創立者は高名な画家のキャマーロル・モルクであった。

(5) Conde, Louis Joseph de Bourbon, prince de (1736-1818). ルイ16世の従兄で、大領主であった。

(6) dāyeh.

(7) dadeh.

(8) naneh.

(9) 皮肉である。

(10) zarr-kharīdeh.

(11) それぞれ、otāqdār, sandūqdar, rakhtshū'ī。

(12) dadeh-khānomī.

(13) Simon, Jules (1814-96). フランスの政治家、哲学者。ソルボンヌ大学哲学教授から憲法議会議員となり、帝政没落後には、国防政府の文相も勤めた。

(14) Ferry, Jules François Camille (1832-93). フランスの政治家。はじめ弁護士、のち代議士となる。共和党の領袖として大臣を歴任した。

(15) カージャール朝第二代の王で、在位は1797年から1834年。

(16) arg.

(17) khābgāh.

(18) 1830年代から50年代にかけてカスピ海で繰り広げられた、トルコマン系海賊団鎮圧の戦いを指す。

(19) E' temād os-Saltaneh. ナーセレッディーン＝シャーの側近の一人で、様々な史書の著者としても知られる。

(20) Garrūs. カズヴィーン、サナンダジ、およびハマダーン各州に挟まれたイラン中部の州の名。

(21) dadeh-ye gorbeh.

(22) 不明。

(23) ファーブルを指すのだろうか？

(24) gholām-bachcheh.

(25) Sorkhe-ye Hesār. テヘランの北部、アルボルズ山中の地名。

(26) āsh-pazān.

(27) 長さの単位で、1ザル (zar') は約 104㎝。

(28) majmū'eh. 縁付きの大きな盆で、通常頭に載せて運ばれた。

(29) Saltanat Ābād. テヘランの北、シェラミーラーンにある村で、当時ナーセレッディーン＝シャーによって建てられた宮殿があった。

(30) Niyāvarān. シェミーラーン中の村名。ここにもナーセレッディーン＝シャー時代に属する建物がある。

(31) Posht-e kūh. シェミーラーンの「山向こう」の意味かもしれない。

(32) lāskoneh.

(33) Aqdasīyeh. テヘランの北15㎞に位置する村の名。

(34) laleh.

(35) kelīd-dār-bāshī.　マシュハドのイマーム＝レザー廟の管理も任される重職であった。

(36) ‘Ammāmeh.

(37) 色とりどりの服や勲章の類を付けた人々が集まっている様子を表現している。

(38) Īkeh.

(39) 注27参照。

(40) 宮中で人が集まる場合、女性たちも心置きなく歩けるように、庁舎などを閉鎖して余計な人間を入れないようにした。

(41) khordangāh.

(42) つれない恋人のことを指しているらしい。

(43) Nāranjestān.　ナーセレッディーン＝シャーの宮殿の向かいに作られた温室で、内部には柑橘類が植えられ、人々はその香りを楽しんだ。

(44) 義父のこと。